

155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139

口無神には云事あたへて。手無神には取事あたへて
 躰無神には五躰をあたへて。足無神にはあゆむ事あたへて
 青き神をば東方へ送り返し奉る
 赤き神をば南方へ白き神をば西方へ
 黒き神をば北方へ黄なる神をば中方へ
 五色の神五方へ送り返し奉る
 今残る神達まします目無神七萬七千十社
 鼻無神十萬七千十社耳無神八萬八千十社
 口無神七萬七千十社足無神六萬六千十社神達まします
 惣て躰無神五萬三千三十社まします
 いんげんの神をば天竺廣き國へ送り給へば
 一時の悪風と成て天竺にわたり給ふ
 さいはひさいはひとやまつて申す。
 又天竺に渡り給へば大六山と申山有
 此山の麓に立とどまり見給へば家一ツ見へ給ふ
 天王御覽有て是いかなるものゝ家ぞととひ給へば
 是は天竺にならびなきこたん長者と申ものゝ家にてましますと申

172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156

天王聞し召しこたん長者の家ならば
 一夜の宿をかせとの給へば
 長者は答へて申。是はしやくそのの御身弟子
 五百羅漢と申佛の御宿にて有間
 他所にて宿をかり給へと申
 天王聞し召し過去（きこ）の心もふかたく
 現（ま）ざひの心もふかたく未來の心もふかたく
 三世未來もふかたく心なるがゆへに
 過去（きこ）の有時神にも近き者ならば
 佛の宿なりとも一夜の宿をかすべきか
 過去（きこ）に有時神をもあひせざる時なりとて
 急ぎ其義を見せんとてたんちの法をむすびかけ
 うしとらの方へふみたる道行給へば
 其内に家一ツ見へ給ふ天王御覽有て
 是いかなるものゝ家ぞととひ給へば
 是は天竺にかくれなき蘇民將來と申て
 ひんなるものゝ家なりと答へ給ふ

189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173

牛頭天王聞し召し我は是日本行疫神なり
 天竺を二見に渡り一夜の宿をかせとの給へば
 蘇民將來承りそれにて少し御またせ給へ
 一夜の宿をまひらせ奉らんと
 木火土金水とて五人の男子せんじゆが野に出し
 ちがやをかり寄新しきこも八枚あみたて
 八人の王子達にしかせまいらせ奉る
 残る神達はちがや一葉の上の一夜の宿をあかさせ奉る
 其時天王百鬼疫行を近付て
 急きこたんが家の内に能々見廻し給へと仰有ければ
 長者さとりのはやきものなれば
 其夜の夢に夫妻のもの
 昔よりちがや七筋はへると夢に見て語り給ふ
 しやくそん達聞給へて
 それは長者ほろぶる夢なり
 時急ぎ五百羅漢達は長者が中のでいに居ながれて
 こんしこんでいの大般若を只一時に

206 205 204 203 202 201 200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190

一萬五千部てん讀し奉る般若十六善神達は
 長者が廻りに立渡り給へて
 くら金にてつひち高さ十六丈につき給ふ
 めうおん菩薩は天に上りて
 くら金のあみをはりかきねのまどをはり給ふ
 疫神達も入べきよふはなし
 天王聞し召し那行都佐神召されて御下知有
 那行都佐神承り青色の鬼神と成り給へて
 くもゐのすきより見たまへば
 上八番目に當りて御年の比三十斗りなる
 佛一人左の方にかいすりすかつて
 居眠りをして文字を一字讀おとす事有
 是が即かきねのまどとなり給ふ
 其時百鬼疫行那行都佐神達
 十二大願を差遣し給へて
 各ほこを捧げかきねを破り給へば
 一々に破れ四方へ散。天に張たるくら金のあみも

223 222 221 220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 207

八ツきれて八方へさるなり
 其時八萬四千の疫神達は長者が達に入亂れ
 長者夫妻のものゝ頭を取て地に付
 かんがうに身をやつしのうらんさせ
 千人のものをなやませ給ふ事
 或はにくをつかみ或は血姓をぬき
 或は骨を碎き血をしぼり給ふ事
 流轉生死のこういんなり
 蘇民是をつくみ給へて天王の御前にまいり給へて
 こたんが内に少女一人まします
 蘇民がためには娘也こたんが嫁にて候
 警長者をばばつし給ふ共
 蘇民が少女たすけてたび給へと申させ給へば
 牛頭天王聞し召し八萬四千人のけんぞく達を引連れ
 蘇民が少女すくはんとて
 長者夫妻のものゝ湯とり水取りと定めて
 千人の中に一人たすけ給ふは蘇民が少女の事なり

240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224

其時しやかぶつ聞し召しいかなる魔王鬼神にてましますぞ
 佛の御弟子迄なやます事ふしぎなりとの給へば
 御身には慈悲にんにくの衣を着し
 慈悲じざひのけさをかけ。じつそうしんによのくつをはき
 百八ぼんの珠數を持。一ゆう三界のしゆじやうをつき
 長者が達に渡り給へて
 牛頭天王じきだん目と目を見合
 いかなる神にてまします其時とひ給ふ
 天王聞し召し御身いかなるものぞととひ給へば
 我は是天竺にかくれなきしやかぶつといふものと答へ給ふ
 天王聞し召し御身が父をばじやうぼん大王
 母をばまやふじんと申。人間躰にやどるもの也
 我は是須彌の半腹豊饒國と云ところに
 父をとむ天王母をばはりさい女と申佛の子なり
 三世の諸佛父母なり九海のくんるいは家なり
 我前で佛と思はゞ御身一人がいして
 千人の旦那の命にかへ給へとの給ふ

257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241

しやかぶつは聞し召し其義にてましまさば
 我一人がいでして千人の旦那をすくわんとて
 しやうへい元年きのへとらの二月朔日に
 左りのゆびに取付若一日若二日若三日
 若四日若七日程なやませ給へば
 只當病と見へ給ふか十日に十の指をなやませ給ふ
 五臟六腑せめ給へばいかなる佛の御身とて
 たまり給ふべからず二月十五日
 けいの初こへあか月に御にうめつなり給ふ
 其時五十二類のけだものも五百羅漢達も
 しやかぶつに御名こり給ふ
 其時しやか佛は末期の一句との給へて
 躰はうすると云共命は有
 四月八日とらの一天に其義見えんと給へて
 百千段の木の下でくわそうし給へば
 煙は天にあがりてしうんたなびき霞となる
 かゝる處は草木とげんじ

274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260 259 258

しやうくの花のいろく咲給ふ
 四骨は二十五の菩薩となる
 何れの衆生をももらさすたすけ給はんための
 御にうめつなるとき牛頭天王は御覽有て
 佛の御命迄取迄なりとの給へて
 いざや日本の地に歸らんとて
 八萬四千のけんぞく達を引つれ歸り給ふ
 蘇民將來も御供申すじゆが原迄参り
 天王御覽有て。それ蘇民にてましますか
 早々歸らせ給へと仰有
 蘇民將來は子孫三ヶ國において
 疫病の苦患をたすけまじきとの御判たび給はれとの給へば
 やすき程の事とて大ぼん天に下り給ふ
 大岩の上に腰をかけ墨摺りながし筆をそめ
 八萬四千神達聞給へ。蘇民將來の家子孫において
 行疫神のいましめ有べからずと
 前なる柳を切りて御判をたまわる

- 275 百鬼疫行那行都佐神たさい神の
 今こそゆるし給ふとも。さきの世に有時
 276 主親を殺し子をがいし七堂伽藍に火をかけ
 277 神佛を焼拂ひ十悪五逆の者生れきて有ならば
 278 御たすけ有べからずと能々過去の因果をしるすなり
 279 たとへ蘇民が子孫なりども
 280 じんてがうてん作佛神三寶供養せざるものにおいて
 281 御ゆるし有べからずとの給ふなり
 282 彼一々の者共は今現在に生れたりとも
 283 ひんなるものに生れべし
 284 是うたがふ心はすべからずとの給ふ也
 285 今日只今しんぐの大旦那王寶號の一ツたり
 286 百二十年のじゆ命をさすけ給へと
 287 色々のはくたひの花のへいそくをかざり
 288 百味の御食だんこくのもりものそなへて
 289 本地本座に祭り返し奉る
 290 只今速に御祈念申き入のうちうをたれ給ふ
 291

- 292 又善根くどくをつくるともこたんが子孫においては
 293 ばつし給ふべきなり我日本の地へ歸らん程は
 294 唐土天然我朝に至迄蘇民將來の子孫の家において
 295 疫病の苦患をさすけまじきとの給へて
 296 八萬四千六百五十餘神等のけんぞくを引連れ
 297 日本の地へ立歸り給ふ
 298 さいはひさいはひとつやまつてまふす

附記 牛頭天王鳥渡りの祭文は、一に神樂の次第に用ゐられたものと言ふが、如何なる行事か不明である。本記録は豊根村古眞立の籠取り鈴木右一郎家に保存されたもので、折本仕立で、同一のものが、別に裏にも記されてある。總て原文の儘であるが、時に用語等の區々なものは、或一種の形式に統一した。而して末尾に左の記載がある。
 文化十一年甲戌霜月日

糸綿のこと

- 1 そもくむかしは天神七代地神五代の
 2 そのち人皇十六代きのあたつのおんとし
 3 いとわたかけと申して。あやはくれはおりひめが

- 4 我朝國をあまりくだりて
- 5 六月わたのぎやうぶ九月九日はきぬのぎやぶ
- 6 霜月あからがしまと申
- 7 いとにてせん疋わたにて萬々分じやうこいとり申して
- 8 あやとにしきとをらせたまゑて
- 9 ときのみかどけんじまいらせそんろいければ
- 10 そのときみかどもうけよろこんでそんろいければ
- 11 其時あやにしきををらせたまゑ
- 12 伊勢は天照大神ところはとう所氏大神を
- 13 けんじまいらせそんろいければ
- 14 その時にしきのしたくれあやのかりきぬつくらせたまいて
- 15 八人の花の八をとめ十二人樂男たがこに
- 16 ちやくせさせたまゑて
- 17 當所氏大神伊勢天照大神宮と
- 18 日本大小神祇をときの神樂をいたしてまいらせそんろいければ
- 19 さるによりていとわたをりひめの神は
- 20 あやはくれはのをりひめの神ともゆわはれたまゑそんろいければ

- 21 こよいこんやのいとわたかけと申も
- 22 かのをんゆわてねんろくそんろぞ

歌

- 1 いとわたをあすびするまによがほけて
あけてつとめてふくをたまわる
- 2 いとわたのかへりあすびによがほけて
あけてつとめてふくをたまわる

附記 「糸綿かけ」の祭文は、別に古真立に傳へたものが一種あるが、殆ど同一のものである處を見ると、これが原本は同一のものと考えられる。尙本口傳は、豊根村三澤宇山内の林順平方に保存された神樂の事と題筆あるもので、未尾に慶長十二歳丁未十一月吉日と記してあるが、全體の感じから、之は以前の蔵本にあつた儘を記したものと思はれる。一方古真立のものは、同所の宇田鹿の守屋眞一郎方に保存されたもので、之には慶安元年九月田鹿森屋氏とある。

四目神樂次第 (下黒川)

- 1 しめおろし之事
- 2 壹之祓之事
- 3 高根を祭る事
- 4 惣しめ之事

各種の記録

- 5 舞屋を清むる事
- 6 刀立之事
- 7 きる目の王子御かひ向ひ
- 8 四方門を堅事
- 9 部屋入之事
- 10 糸宮を祭る事
- 11 瀧をり之事
- 12 折立祓之事
- 13 惣かい向ひ
- 14 天を打事
- 15 樂之舞之事
- 16 とうこはやし事
- 17 四季三番事
- 18 地堅め之事
- 19 順之舞事之
- 20 市之舞之事
- 21 ひとくら遊び

- 22 御す御料之事
- 23 をり居の遊び 西東
- 24 花之舞之事
- 25 三ツ舞之事
- 26 釜洗ひの事
- 27 御湯の事 西東
- 28 湯境に能あり
- 29 山を立可事
- 30 山を尋可事
- 31 中人之事
「中」トモ見ユツワリテラン
- 32 惡理物之事
- 33 生れ子之事 うぶ湯
- 34 瀧しめの事
- 35 にわしめの次第
- 36 恩徳勝負 こうかづら
- 37 四季之牛王
- 38 若子之しめ

- 39 返拜
- 40 惣しめを開くべし
- 41 しめ切越之事
- 42 旦那に湯をつかわする事
- 43 中手祓の事
- 44 四ツ舞の事
- 45 獅子舞之事
- 次之晩の次第
- 46 大行事勸請之事
- 47 白山を造る事
- 48 たつ合十二疋
- 49 返拜土公の事
- 50 懸鏡布帶惠方え
「懸鏡」トモ見ユツワリテラン
- 51 座直り之事
- 52 折立祓の事
- 53 惣かい向ひの事
- 54 天を打つ事

- 55 樂の舞之事
- 56 四季三番の事
- 57 地堅めの事
- 58 市之舞之事
- 59 ひとくら遊びの事
- 60 旦那の舞之事
- 61 御す御料
- 62 をり居之遊びの事
- 63 花の舞の事
- 64 三ツ舞の事
- 65 湯はやしこ木之事
- 66 能をすべし 神子禰宜翁
- 67 聖りの舞の事
- 68 山を立べき事
- 69 山を祭る可事
- 70 山を尋可事
- 71 山を賣買可事

- 72 返拜を踏可事
- 73 井戸しめを開也
- 74 若子之しめ之事
- 75 四季の牛王を渡事
- 76 すひしやくの遊び事
- 77 部屋入之事
- 78 橋を拜見
- 79 浄土に入事
- 80 食だい茶湯
- 81 鬼を出すへし たいを夫「つがとら
- 82 浄土には繪を掛け出家を置
- 83 打鋪之切三端
- 84 獅子出し山を割

正徳貳壬辰十一月

禰宜

彦太夫

殿樂(註でんがく)躍初り覺

- 85 山を引可事
- 86 よな船をこぐ可事
- 87 をほろけ之事
- 88 子玉を掛け可事
- 89 こでい遊びすべし
- 90 魚を釣る事
- 91 見る目之遊び事
- 92 ひいなをろし事
- 93 大行事歸り遊び之事
- 94 御山狩り之事
- 95 いづな立
- 96 せん法を讀

- 1 おめでたや堂の掛りを見てやれば
すそはしゆばしら屋根は栃茸き
- 2 なんとゆいても御薬師しや目出度や 升きりに斗垣とがきを手に持て
黄金はかるよざらりくと
- 3 今年十三寅の年參る薬師も寅の年
寅やかさねておめでたや
- 4 獨娘が掣とりかねて 濱の鹽焼き掣にとれ
- 5 十七がまりをけしよものあのくぼで
- 6 あかねこ袖をのぎ下げて
鳳來寺岩に岩松岩つじ
- 7 あかねてらすよ赤根岩ばし
正月のひとゑ二日の初夢に お月枕にお日だいて
ちこのさかづきとるこそみた
- 8 鳳來寺薬師夜行と參らねど
妻をたづねてもちゐの十四日
- 9 鳳來寺いかに本堂がせまいとも
おされまいぞよ門谷若衆

- 10 濱松で網をまきする若衆が
網の目ごてへ掛れこのしろ
- 11 正月の登を二日の初夢に白き鼠を三ツ連れて
こがね運ぶよざらりと
- 12 なんとゆいても正月目出度や 門に若松をよくと
月も多いが日もおほい 繻ももかの十六日の雨のつらさよ
- 13 山中のしゆでん坊主が世に落て 破れ衣で竹杖で
はちを開くよこまき市場で
- 14 娘やるまい濱松へ 晝は糸操夜さは網すく
あみの目ごてへ掛れこのしろ
- 15 芳野では霞がしげりて露持て
簑を召されよ簑を
- 16 十七が芳野川原に晝寝して
鮎あせの瀬とり夢にこそ見た
- 17 高切窓西高連子せめて手を出せお手を出せ
そのみくをしめてなむさま
- 18 我等思は西へゆけ高き縁から砂を蒔く
- 19

- 20 雨が降るよおてあわす
十七が殿よくと尋ねて巡る
- 21 殿は高天笠の海の岩草
十七が殿を定めかねつけて
笹にふる雪葉をかくす
- 22 新城で朝よ出舟にきや袴をわすれ
いかに船頭も竿にかけまい
- 23 新城の朝よ出舟わ女越て
森を目當に漕よ舟方
- 24 新城の麻の種とちや播かねども
朝よ戀しや新城で
- 25 月もわすれぬ六月の川で 約束しておいた
今はやられぬ濱の鍛冶屋へ
- 26 十七を連れて逃れば追手が廻る
竹の丸竹まだあわぬ
- 27 鳳來寺北の御山に立煙り 雲か霞かなこぢやないか
又は薬師の香の煙りか

- 28 鳳來寺上と下には籠に時鳥
中に巢ごもり掛て殿にこもらしよ
29 蘭目小田式あやふいとこよ
粟で身を持茶ですぎる
30 十七が極の小枝に糞寝して
花の散るのを夢にこそ見た
31 十七が師走八日に機立て、くだの一ツおらんとすれば
腰のしんばをはづせ三郎右衛門や
32 獨り娘をやるぞよ婿や 打なた、くな追出すな
おしのおもい羽でさすれ舞殿
33 十七がそゝのけまわし唐糸で
布わしき千針でもはちはかくまる
34 小松原から濱松へ通ふ鳥は節鳥
35 四月の卯月八日に待かねて 山をならすよ時鳥
36 名古屋おせんとねぬものは 犬と鳥と鶴と
峯の子女郎と我とおればかり
37 鳳來寺御坂下りの咲く花も 折て一枝ほしけれど

- あれも薬師の泉水だ
33 鳳來寺御坂下りの泉水も
あれも薬師のだて巻
39 いじやよ友達濱松へ 御社の玉屋を見物に
十七が織りや着せたる細布を
針目糸目を泪流れる
41 安託てめぐり佛のあり曾川
瑠璃の光りもあらたなりけり
42 びんご疊がおがせになれ共
こよい一夜ははなしやせまいと
43 寒い處よ新城は ふきや上るらよ吉田川風
44 十七がだいでおよれよかんなべなりと
朝よおなべの心して
45 あさよおなべの心はせよとも
だいてねらりよかかんなべが
46 十七はきつしうとや昨日きた嫁に
岩を袴にたち縫へと

各種の記録

- 47 御うづの若衆わかしゅが 犬に追はれて深山みやまこそく
- 48 鳳來寺岩に住石がけ造り
いかに薬師も岩がたんとよかるら
- 49 蘭目甚太郎さは百に三坪の大屋を
かゝするみそにたき
- 50 どうでもそわじやならまい甚太郎さん
高野聖が宿かりかねて 宿にかり兼女郎屋に
宿かりありて念佛より女郎屋よかるら
- 51 なんとしめたや庄屋の姉
はだはみぬきで身はかんぞ
腰やおそうわ鹽のがんぎり
- 52 十七が神の神殿へ手をかけて
なにをしやるよ今の若さで
- 53 十七がけはひ化粧は外からぬれど
むさい心はぬられまい
- 54 鳳來寺東門谷に女郎なくて
雪をまりけて女郎にして

- 抱いてねたれば心ひやく
- 55 藤枝の女郎に心はなけれど
親の仰なら行よ掣入

附記 本巻之帳も北設楽郡豊根村古真立字曾川鈴木右一郎家に保存されたもので表紙及び裏に左の文字がある。

(表紙) 毎年正月八日晚 庵薬師様儀式

嘉永七年寅正月吉日

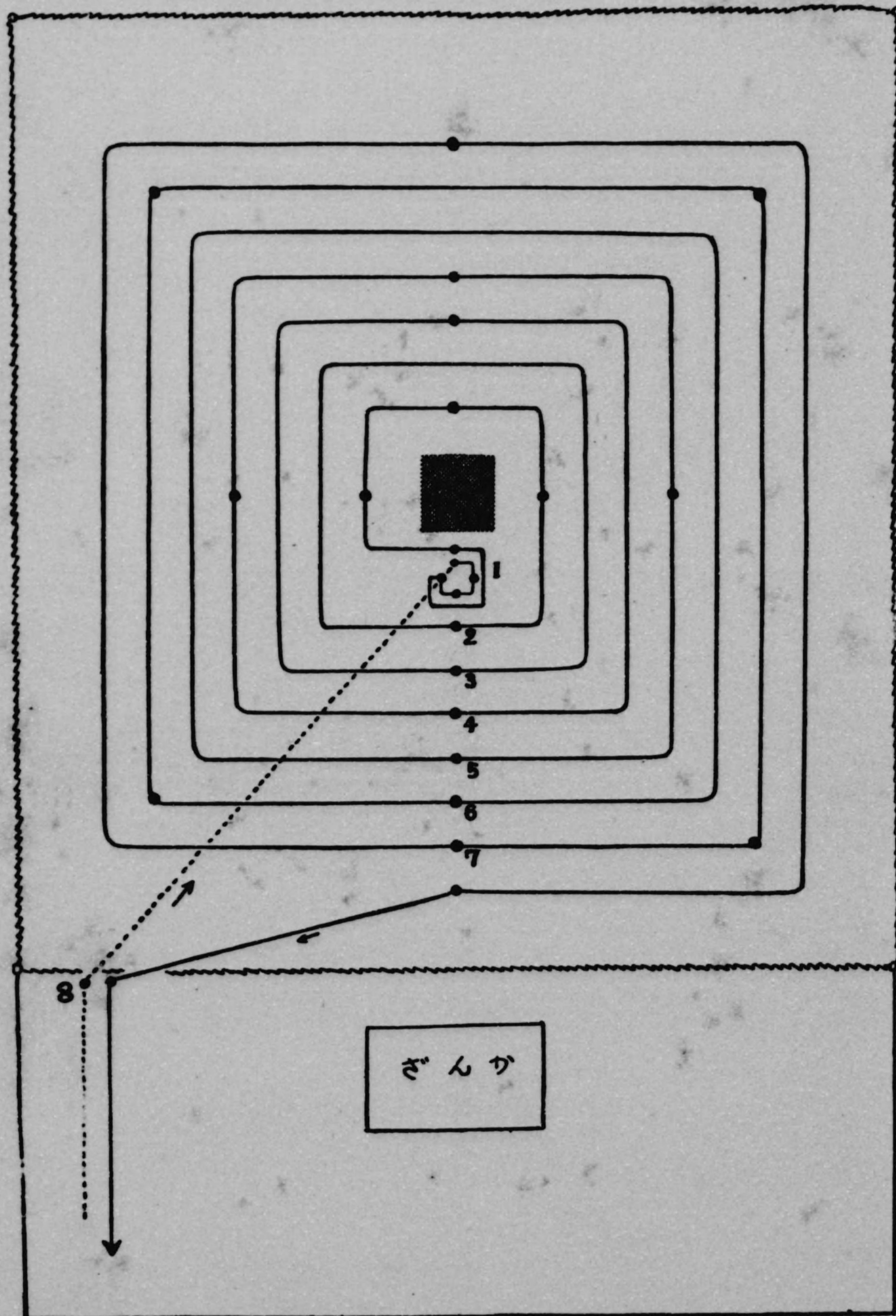
本式飛世蹟御記録帳

(奥書)

三州設楽郡曾川内

福喜右衛門寫之
又孫 徳藏寫替

圖版第一七 さかきの舞動き (前編補遺)



1. 五方見 2. 問答反問 3. 釜割り 4. 松火割り 5. 片手舞
6. 四方立 7. 天上舞 8. 上り框の位置(下黒川)

本圖版は前編「さかき」の舞の部に挿入すべきものであるが、別に補遺として附加する事とした。

後記

花祭り——を中心にして、天龍川奥地に残存した各種の祭りの探訪を始めてから、うか／＼とする内もう七年経つてしまった。最もその前からも、この種行事の存在に對する注意は拂つて居たのだが、幾分でも之を記録に留めて置かうと思ひ立つてからの事である。その間にこの山村に秘められて居た行事は、段々中央にも問題になつて、それぞれ専門家の研究題目になり、もうこの頃では、大體判つてしまつたやうなものだ。何時迄もぐじ／＼こね返して居る中には、そろ／＼忘れて了ふやうな時世である。然しこの山村の生活に踏込んで見ると、到底一回や二回の探訪では概念を掴むだけでも容易のことではない、山の奥には入つて見ると、思つたより底は深いのである。それで今日迄、多い年で五回少い年でも二回、仕事の暇々を見ては、三河から

遠江信濃と、あの山地を歩き廻つた。日記を調べて見ると前後通算して二百二十餘日を費した譯であるが、まだ未だ真相を掴むと言ふ所へはゆかぬ。祭りの當日に行逢はせた回数も、花祭りだけで十六回になるが、それでも二十三ヶ所の中の三分の二程にしかならぬ。勿論十六回の中には、同一の場所を繰返したのもあるから、各異つた行事を觀たのは十三ヶ所で、ざつと半分である。その他に土地の人の好意で、特に祭り日以外の期に、型をやつて貰つたのが一ヶ所だけあつた、振草村の小林である。

花祭りを見學する事も、祭りに當る人々に劣らず辛棒の要る經驗であつた。何分二十四時間も三十時間もぶつ通しの行事であるから、一通りの次第を克明に觀ればへと／＼になる。頭の中も茫乎して、もう何を考へるのも厭になつてしまふ。その上時には甲の地から乙の地へ、一方を濟して直ぐ出立せねばならぬ事もある。もと／＼この行事に全精力を傾倒して居る事は事情が宥さぬ上に、祭りの時期は短い。それで睡眠不足の體を、夜道を掛けて峠を越した事も何回かある。三河の下津具の花祭りを濟して、遠江の西浦の田樂へ行つた時であつたが、朝の六時半に宿を發つて、天龍河畔の中部^{なかつべ}迄行く間はどうかやら日があつた。あれから河に沿うて佐久間に出て、二本杉の峠路から水窪の町迄、四里の路は全くの夜道を通つて行つた。宿へ著いた

らもう脚が立たなかつた。こんな事は何も自慢にもならぬが、斯う忙しい思ひをしても、實際見る事が出來たのは一部分である。事實は容易に涉取らぬものであつた。

二

何時迄、何遍繰返した處で大した發見がある譯ではない。大體かうと決めてしまつても、えらい間違ひはないのだが、實は村へは入る度に判らなくなる。人に據つては道樂とでも言ふであらう、それは何とでも批評に委せて置く。もう判つたと思つたのが、後に別の土地のものを見ると判らなくなる。それで居て今になつて思ふと、大切な部分を悉く見落して居たやうで、どうでもよい、問題にする迄もない點に、無暗と力瘤を入れて來た感がないでもない。殊に舞踊の説明などは、なまじい手を附けた爲に、反つて不可解になつてしまつた。あれで自分としては、村の人に就いて舞の手を一通り習つたのである。ほんとに舞踊その物を説明するには、尠くもそれだけに三年五年を費やさねばならぬと思ふ。それで結局何も判らない事になる。ふつと問題の一ツを質問されても、直ぐ返答の出來ぬやうな不安が今でもある。然し之は一方から考へると、判らないのがほんとも知れぬ。何も自分だけが殊更理解力に缺けて居たと決められ

ぬ、さうした氣休め言を思ひ思ひ、兎も角手帳を纏めること、した。彼此それをこね返して、おそろしく長い長い、之は印刷の徒勞だと嗤はれても、一言もない物を拵へ上げてしまった。それで居て學問上の大切な事實を、手帳に書留めてあるもの迄、みんな落して居たやうな氣がする。之は説明の組立ての不用意な點もあつた。何處かで言はう言はうとして遂ひ言落してしまふ。斯うした例も何程かある。小さな部分的の事實は格別として、是非言はねばならぬ問題としては、本文にも度々引用した信濃の新野の雪祭りである。大正十五年の一月、折口さんに見學した際、自分としてはさうした経験の最初でもあり。大仰な言分だが、寒氣骨に徹する嚴冬の夜を、外套もなしで立ち通して記録を採つたのだが、後になつて整理して見ると、判らない事ばかりである。之は今一回見直さなくては駄目だと思ひ付いてからは、どうやらこね上げた記録も遂ひ挿む場所を失つてしまつた。然し考へやうに據つては、此儘置いた方が宜いかも知れぬ。さうしてもつと適當な理解者が出て來る事を願ふのである。新野の雪祭りに續いては三河の操り狂言である。之も手許に記録だけは作製したが、取落してしまつた。其他盆踊り田植の歌謠である。之は豫定以上に頁を喰ふので除く事とした。

自分としては最初からこんな長たらしいものにする氣は毛頭なかつた。せいせい四五頁止

りで、簡潔に要領だけを握まうと、頭の中では理想的な報告を夢見て居たのだが、扱事實に當面すると、空想は型なしに毀れてしまつた。それと一方には問題が段々擴がつてゆく、極く些々たる事實である村々の親方屋敷、禰宜屋敷を中心にした移動の状態、神社の變遷、一般的な風俗習慣と各種の傳承、殊に屋敷の變遷移動に伴ふ村の入合ひの状態等は、今ならどうやら痕跡を掴む事が出来る迄になつたが、之を始めたら亦三年や四年は瞬く經つであらう。

三

今になつてやつと氣が附いたのだが、事實の真相を文字に據つて傳へやうなどは、實は自分などには能はぬ事である。斯うして書つらねたものを見ると、事象の存在と記録とは別のものだ。ありの儘を、客觀的に表現しようとする程、或概念が出來上つて來る。事實又さうならなければ記録など作れるものでなかつた。

この本が三分の一以上活字になつてから、更めてもう一遍祭りを見て、つくづくその感が深い。最もそれに對する責任も、前から考へぬ事はなかつた。斯んな事は自分などが携るべきではない。誰かもつと有力で適當な人がある筈だ、第一四圍の事情も自分には之を許さぬものが

ある。それや之やで採訪に取掛つた中途で、一日友人の宮本勢助さんに零した事がある。自分には別に仕事があるのだから、斯うした事をやつて居たのでは、前途も案じられる、さう言うて直ぐ投出すと言ふ程思ひ詰めても居なかつたが——ほんとの零し話である。その時宮本さんが言うて下すつた。世の中の仕事と言ふやうなものは、誰人最初から吾身の爲に恵まれたなどと考へて當る者はない、知らず知らず深まへ落込んでゆくのではないだらうかと、さう言はれて見れば詢にさうでもあつた。考へやうに據つては一ツの因縁に牽かれて居る。然し後になつて思ひ返して見ると、この自分の態度は傍の人々にも目に餘つたやうだ、柳田先生はもとより、折口信夫さん岡村千秋さん等も、ほんとの後輩に對する思ひやりから、前々の見極めもなく、脇道へ外れて追従つてゆく向ふ見すの足取りを、如何に危なかく見て居られたことか、それをひそかに感謝しつゝも、尙續けねばならぬ破目に墮ちて行つた。これがもつと働き甲斐のある、より見榮えのする仕事だつたら、自分などが彼此言ふ迄もなく、疾うの昔に誰かが掛つて居たであらう、何を言ふにもたかが一地方の問題である。これ迄にしても誰も手を付けようとしなかつたではないか、例へば花祭りの中心地である三河に關する記録の類だつて、自分が知つて居るだけでも百種を踰えるのに、この種行事に就いて、嘗て一行でも書残されたものは無

い。或は未だどんな處に匿されてあるかその點迄は斷言出来ぬが、兎に角戦争の記録や一部の階級に對する史實は少し煩はしい程あるが、何れも事實への接觸點は極く微細で、机の上で編まれたものであつた。さうして見ると、この後とても自分のやうな斯うした下積みの仕事を、思ひ立つ人があるであらうか、勿論今後は部分的に之を參考とする人は出るであらうが、事實の存在そのものに對して、まるきり下積みの役廻りに當る人を求めたらどんなものか、それやこれやを思ふと、なまじい記録を作るのなら、大體潮刻と言ふやうなものがある。やりかけた限り、能ふだけは真相に近いものにして置かう、さうした意圖もあつた。然しその一方には、記録の害？と言ふ事も考へた。こんなものでも一度公にされた結果が、あの事象全體に與へる影響を思ふと心持の暗くなるのを覺える、之は何も事實に對する諛ひでも何でもない。

四

言ふ事に兎角前後を生ずるが、この採集に著手するのも又一ツの因縁であつた。動機とか衝動などと言ふのでない。ほんに何かの力に引摺られた感がある。

今思ふと大正九年の十一月であつた。柳田先生が東京朝日の紙上に秋風帳と題する紀行を書

かれながら、東海道を西へ西へと歩まれた時、遠江の濱松から山地には入つて、段々に三河路へ進んで行かれる。自分は東京でその記事を読みながら、今日は何處明日は何地、もうそろそろ三河路に踏込まれて、長篠の古戦場附近を歩かれる時分だと思ふ中、突然長篠の驛から葉書を下すつた。その驛は谿を隔て、自分の育つた屋敷からも一目に見られる位置にある。葉書を手にした瞬間、驛の待合に立つた先生の姿が目に見えるやうに思つた。その文章は今に諳記して居る——秋の旅知る人もなく殊に淋しく候——と終りに記されてあつた。

丁度それと前後して、折口信夫さんが先生とは逆に、木地屋の部落を尋ねて、岡崎から矢矧川に沿うて上つて、信濃の新野に出で、あれから三信遠の國境を天龍を涉つて、遠江の水窪から山住、京丸と歩いて居られたのである。

柳田先生から葉書を頂いてから二十日後には、自分は牛込加賀町の御宅で先生にお目にかつて居た。その折の談話がそも／＼の發端である。談は多く遠江から三河に掛けての、先生の旅行の感想であつたが、三河の山地殊に自分の郷里を中心とした地方の氏神の拜殿と、それに並び又は兼ね建てられた地狂言の舞臺には、建築様式の上ばかりでなく、神祭りと地狂言、延いては神事能の關係を考へる上に於て、殊に興味を惹くものがあると言はれた。自分は當時さ

うした事象に對しては何等の要意もなかつたので、何一ツ答へも出来なかつた。あり體に白狀すると、あんな舞臺の建て方にしても、さうした根本を爲す理由が籠つて居るものかと、寧ろ不思議に感じた位のものである。

柳田先生はその折の談話が緒口となつたのかも知れぬ、その邊の氣持は今明瞭に言ひ現はせないが、兎に角その席での談話が因になつて、自分が持つて居た村の話を纏める事になつた。爐邊叢書の三州横山話である。横山話の材料を整理して見ると、自分の記憶にある話の中には、不思議な位地狂言の噂ばなしがある。どう言ふものか村の人達が狂言に夢中になつて居る、従つてそれに關係した話が殊に多い。この種の噂話を、單純な氣持から、村の人達の心の記録として、一通り蒐める事も、或は何かの材料となるかも知れぬ。こんな風に考へて横山話とは切離して、別に書留めて置かうと思ひ立つて、その事を先生に話して見たものである。自分は一切夢中であつたが、先生は自分の談話の奥に、何物かを感じられたのであつたらう、その事を大いに賛成して下すつて、大正十一年の春ジュネブへ出發も迫られた或日、地狂言雜記と本の名迄も決めて頂いて、間もなく爐邊叢書の豫告にもなつて現はれた。

僅々十年足らず前のことであるが、斯うした事象を書物にする事などは、おそらく例の無い

事であつた。單なる笑話の本位の價値を想うて居たのである。追々原稿を纏めて、先生の閱を乞ふ迄になつたが、扱出來上つたものを見ると、新たに舞臺の位置に對する疑問等も出て來て、これを一方の噂話と列べる上に、自分には整理が出來なくなつてしまつた。もう少し他の方面の事實に當つたら、或はこの間の聯絡も明かになるかも知れぬとなつて、今度はそれをやり出す中、一方鳳來寺田樂や田峯田樂にも根を引いて來る。さうなるともう何が何やら一層不可解になつてしまつた。大正十二年の暮も迫つた或日、加賀町の御宅に以前の郷土研究に關係の人々が集まられた、自分もその末席を汚したが、その折何かの教示でも受けられるかと、鳳來寺田樂の覺え帳と、熊谷芳惠君が筆録した田峯田樂の次第を懐にして行つた。おづく之を机の前に差出して見たが、先生以外には誰一人こんな田舎人が筆録した、古ぼけた覺え帳などに目を呉れる者はない。何だか大變邪道に墮ちつ、あるやうな引目を感じて歸つたものであつた。さう斯うする中、翌年には高野博士の鳳來寺田樂の記事が文藝春秋に現はれ、間もなく小寺融吉さんが、第二次の發表と銘打つて梗概を書かれる事となり、實は問題が判らなくなつた上に、地狂言雜記の發表は此處で一頓座してしまつた。その頃自分は、山の寫生を兼ねて、田峯田樂や花祭りの行はれる地方へ、ぼつ／＼は入りかけて居たのである。

五

斯した一方に、自分には一ツの忘れ難い記憶が絶えず心の中に繰返されて居たのである。たしか十三の年の春だつたと思ふが、一年村の近くの鳳來寺山麓の門谷へ、振草村から花祭りの一團がやつて來た。今考へれば一力花であるが、夜晝打通しの祭りの一方に、野天に籠を築いて、えらい惡態を言ひ合ふとの事に、何だか少し氣おくれがして、遂ひ見物にも行かないでしまつたが、祭りの最中に、何か立願でもしたと見えて「さかささま」と言ふのが「へんべえ」を踏みに自分の屋敷へ訪れて來た。赤く塗つた奇怪な表情の假面を被つた男が、手に黒い大きな鉞を持つて、座敷の椽側を上つて來た。近所の人達がぞろ／＼と後を隨いて來たが、その時の印象は今もはつきり目の前にある。實の處それ迄自分は、假面を被つた姿などは神樂の獅子の他には見た事もなかつた。それで獅子とも異ふ、さうして人間でもない、今なら鬼と言ふやうな言葉がすぐ浮ぶのだが、前々から「さかささま」の怖ろしい話を聞いて居た際であり、さうした考も出て來ない、さう言うて神様といふ威も起らなかつた。一種不可解な氣持で之を迎へた

ものである。母に促がされて戸を閉切つた奥の間には入つて俯伏になつた。「さかきさま」に「へんべえ」を踏んで貰ふことは、何かしら宜い事だと聞かされた事を覚えて居る。父と竝んで横になつて、細目を明けてその奇怪な面の持主を見ると、どうしても人とは思へない身振りをし、太鼓の調子に合わせて土足の儘の足を踏代へて居る。あの足でどんな風に踏みつけるかしらと思つて居たら、それでも體の上を二三度跨いだだけであつた。前に聞いて居たのでは、骨も折れよとばかり踏むやうに想像して居たのが、何だか少し「さかきさま」の方で手心を加へたやうに感じられて、期待に背かれた氣持もあつたが、それでも跨ぐ氣配を感ずる度に、體中の血が止るやうだつた。思ひの外短時間で「へんべえ」は濟んで、父が手渡しする酒代と書いた「おひねり」の紙包を、伴の男が受取つて屋敷を出て行つた。やつと解放されたやうな氣持で、今度は後から隨いて行つたものである。

六

その事以來「さかきさま」の奇怪な面と、人形振りとも言うた態度が目に残つて離れなかつた。家の者や近所の人々の語る處では、その鬼の出る祭りは、奥の振草地方へ行くと、何處の

村にもあつて、寒い寒い冬の夜に、夜通し火を焚いて行つて居る。白い髪を被つた「やまわりさま」と言ふ鬼も出る。その他澤山の鬼が出て、目にも止まらぬ程の速さで舞ひ通すとの事である。當時の自分は、振草の郷がどんな所かも未だ知らなかつた。寒い夜の祭りと言ふ聯想から、寒風の吹き荒む別天地を忙乎心に描いて居たのである。

それにしてもあの巨きな面を被つて、祭りをする村は、屹度何か譯があるに違ひない。然もその祭りを「はなまつり」と言ふ事も、想像も及ばないが何か據り處があるであらう、さうした間にも、振草地方から村へ来て居る人達があつて、その人々が、次々に祭りの状況を供給してくれた。再度見物したと言ふ隣屋敷の婿は、棒切れを持つて鬼の舞ひを真似て見せてくれた。殊に自分の屋敷へ出入りの女は、花祭りの福宜屋敷に永い事奉公して居たとかで、その話と言ふと、夢中になつて各種の次第を語つてくれた。

斯うした記憶があつた爲に、地狂言の話の次手に、柳田先生にも語つたものである。それで先生が、地狂言雜記の末尾に、話に聞いた範囲内で、次第だけでも記述に留めるやうに注意せられたが、自分には地狂言と花祭りとの關聯が附けられぬので、之はその儘記す氣にはどうしでもなれなかつた。それで郷里へ歸つた度、花祭りの行はれて居る土地から來たと言ふ人々を

訪うては、掘り葉掘り状況等を聴いて、行事の順序次第等に對して、概念だけはどうやら得る事が出来た。

その中大正十五年の一月になつて、折口さんのお伴をして、新野の雪祭りを見學する機会を得た。それに引續いて、三河の花祭りにも逢つた。豊根村三澤のものである。三澤から中在家を訪うて見ると、こゝは又大分様子が變つて居る。然しその時の印象から、梗概だけを記して地狂言雜記の附録として載せる事としたが、掘記録にして見ると、判らぬ事ばかりある。充分手帳に書留めたつもりでも、後に讀返して見ると、極めて臆ろげで、どうしても實感が喚起せないものがある。さうした一方には、豊橋の鬼祭りの事實も考へられる、更に岡崎在瀧山寺の鬼祭りの次第を石田茂作さんから聞くと、之も何か關聯がありさうである。更に北設樂郡の事實にしても、未だ何處と何處に行はれて居るかも知れない。斯うした事情もあつて、第二期の地狂言雜記の脱稿も頓座を重ねてしまつたのである。

七

前に繰返したやうな経緯から、もう一度もう一度で、三河の北設樂郡を中心に、遠江の引佐

磐田周智、信濃の南部から美濃の惠那の一部地方を歩き廻つて、どうやら祭りの分布と地理とを知る事が出来た。

今更愚痴を言ふやうであるが、斯うした探訪に當るには、自分等の微力を以てしては、多くの徒勞を重ね、ばならなかつた。村から村と訪ねて行つても、何等社會上の背景を有たぬ者は、行く先々で卑屈な不愉快な經驗を嘗めねばならない。況して村へは入る度、途中道連れになつた人や畑に働いて居る人達から状況を知つて、名もない老人などを訪うて歩くと、一層偏眼を以て遇せられる。村の話聞くには大體順序がある。村役場とか或は小學校の手を経て、それに應對する人が、何處の土地にも待つて居たのである。さうした人々に限つて、或種の權力には殊更卑屈であるが、さもない者に對しては正反對の態度を以て向つて來る。それだけに權力の背景を有つて居れば便宜が多い、旅宿に故老を召集して、記録類等も一通り提出させる事も出来る。それを逆に此方から訪れたのでは、禰宜屋敷の口傳書の一ツを閲覽するにしても、容易の業ではない場合がある。上り框に腹這ひになつたり、椽側の端を借りて筆寫などして居たのでは、能率はさつぱり上らぬ。それも近所に宿屋でもある土地は宜いが、さうでもないとい、一里二里の遠方から、それを寫す爲に通はねばならぬ。初對面から簡單に借出したり送らせて、

ゆつくり騰寫する等は、夢にも及ばぬ事であつた。この點に自分の採訪には大きな徒勞があつたと思ふ。後になつて折口さんが聞いて笑はれた事であつたが、下黒川の禰宜を訪うて、面の拜觀を乞うた時など、最初から如何に頼んでもてんで相手にしてはくれなかつた。それからもう一ツの厭な經驗は、何等か不純な計畫があつて、村々を廻つて居るやうな待遇を受ける事である。黒倉田樂を最初に訪れた時であつたが、村の人達が多勢神社に集つて居て、何か田樂の傳法でも盗みに來たやうな警戒振りである。その氣持はよく判るのだが、當面して居ては餘りよい感ではない。今に忘れぬが田樂の水口取りの役で、「みやうど」は京都の妙心寺から血脈を頂いた者だと説明してくれた老人であつたが、此方の質問に對して、そんな事を聞いて歩くからには、何か旨い利益があるのだらうと言うて承服しなかつた。つひひら／＼として何やら言うたが、茲に改めて失禮を御詫びしておく。斯うした經驗は、考へやうに據つては愉快でもあるが、時には堪えられぬ場合もあつた。自分には少しは期待する點もあるが、今後は或は無駄な事かも知れぬ。

八

最初の豫定では、大略採訪の順序を日記體にして記すつもりであつたが、結局同じ事の繰返しのやうに考へられ、徒らに長くなるからもう止す。唯最後に一言して置かねばならぬのは、記録の作製と採訪の態度である。前にも言うた如く、ありの儘を、眼に映り心に感じたまゝを傳へるとしても、結果はやはり主觀から出發せねばならぬ。一方採訪にしても、悉くの存在に漏れなく當るなどは能ふべきでない、略ぼ見當をつけてそれに基いて進む、之より仕方ない、その見當は柳田先生と折口信夫さんの學問を發足點として居る。柳田先生の指導を仰ぎながら、一方折口さんは忙しい中を一緒に三河から遠江と歩いて下すつて、事實に直面して啓示を受けた事も一再でなかつた。この記録に、少しでも將來の學問に役立つものがありとすれば、それは自分の力ではない。この二人の先輩がなかつたら、記録は出來なかつたと思ふ。さう考へる時、少しばかり時機の遅い憾はあつたが大きな諦めがつく。然しさう言うたとして、責任は悉く自分にある。それで自分の態度に對しては、先生初め定めし不本意に思はれる點がある事と信するが、これは如何とも致し方なかつた。適任を得なかつた結果になるのである。唯自分としては、真相を傳へる事をのみ願うたのである。それを改めて茲に御詫びをして置き度い。

次には採訪に當つて、各地の方々の援助と教示である。之に對して一々芳名を掲げる事も一

ツの禮儀である事を辨へぬではないが、之は悉く禮を缺かさせて頂く、芳名を擧げられる方々は宜いが、名も聞かないで別れてしまった人もある。その人々の風貌は明かに眼に残つて居て、定めし健在で居られる事と信するが、中にはもう他界された方々もあるであらう、大正十年地狂言の探訪を始めてから今日迄には、消息の判つた人々で、已に此世に居なかつた人が澤山ある。中には談話が記録になつて現はれるのを、心待ちにして居られた人もあるやうに思ふ、その人々に對しては、殊に心残りの多いものがある。

まだまだ言ひ出したら、何を措いても申さねばならぬ事がある。それに對し沈黙を守ること、自分としては苦痛の上ないのであるが、それに觸れるべく餘りに微力な事を遺憾に思ふ。

ふ。(昭和五年二月五日)

跋

折口信夫

一つの解説

またあの時のひそかな感動は、消されないでゐます。小正月を控へた残雪ハタレの山の急斜面、青い麥の葉生えをそよがしてゐた微風、目ざす夜祭りの村への距離を遠く感じさせる笛の響き、其後幾度とも知れぬほど、私どもの、花祭りにあひに出かける心の底には、此記憶がひろがつて居るのです。五年ほど此方、初春にさへなると、三・信・遠の三州の境山へ、ものにおびかれた様に出かけることになつた訣は、この「花祭り」の作者早川さんが、最も呑み込んでゐられるはずです。今では、廣い東京にも大分、花ぐるひなどと冷笑せられることに、却て満足を感じる人々が殖えて來ました。此は皆、早川さんのきめの濃やかな噂話に魅いられたのです。

昔も、洛中に田樂流行して、狐の業と騒がれた記録があります。花祭りにもさうしたつき物の力が、籠つてゐる様な氣がしてなりません。

其最初の發見者であり、今尙、語ることに、益幽に入つて來たのは、早川孝太郎さんであります。さうして、其手初めに誘惑せられたのが、實は私でした。花祭りを思ふ毎に、此大和繪かきの懐しい話しぶりを憶ひ浮べずには居られません。私などの花祭りに關する乏しい知識は、隅から隅まで、此人の東道によつて、とりこんだものと言はねばならぬ。其ほどおかげを蒙る事の深い次第を、皆様に告げておきたいのです。

花祭りに、「ねぎばな」と「法印ばな」とがあり、其が、設樂シタラの奥山家に、昭和の代にも繰り返されてゐる。さうして、時には、「役花」の願主の招きに應じて、平野近くまでも出て來る。その行儀のうちに、鬼のへんべなるものをふむといふ事があつた。さう言ふ不思議な記憶が、長篠ナガシノの山口で育つた幼時の印象として残つてゐる、と初中終、早川さんから聞かされて居たものです。その頃既に、早川さんは地狂言を研究せられてゐました。さうして私も、藝能史の組織を思うて居た頃でした。其より四五年前、私もまだ若く、感傷に溺れ易くてゐた頃、信州の南隅、下伊那の且開村の通りすがりに、新野の伊豆權現の正月、雪祭りの田樂の話を書いて、又來る時のありさうな氣がしてゐました。新野から東三河の東

北隅、佐太に越える坂部サカベといふ字では、雪祭りの面が、遠州から盜まれて來る途次、一つ其處に忘れ残されて、新野の祭りの日には、荒びてならぬといふやうな事も、上の空に聞いて通つた事がありました。此雪祭り見物の宿願と、早川さんに唆られた花祭り探訪の欲とが、道順によい日どりも續いてゐる事を教へられました。大正十五年の正月でした。前後五日に亘つて、雪祭りの作法と、村人の感情とを凝視しました。本祭りの前日は、一日だけ目だつ行事もなかつた。その日ちようと、三河領豊根村三澤の花が、坂一つ越えるばかりの牧ノ島といふ字アサにある、と聞き出された早川さんと、村の好學者中藤増藏氏とをたよりに、はじめて、新野峠を越えました。設樂の山村の、寒く霞んだ夕を、靜かに見おろした其夜を徹して、翌日晝まで見續けたのが、私にとつて、初めての花祭りの行事でありました。此時のが、早川さんの區畫に従ふと、振草川系統・大入川系統とある、其後者の現在での代表と見なしてよい、三澤山内ヤモオチのものでありました。

其頃の三澤の花には、顔の整うた、舞ひぶり優な人が揃うて居ました。三つ舞ひ・湯ばやしなど、若衆の役になつてゐるものは、旅人の私どもにも訣り易く、味ひよかつた、と記

憶します。

繪巻物に見る下人の直垂から法被に、さうして、近代のはつび・絆天の出て来る道筋の明らかに見える上衣ユウギに、山袴をつけた姿は、新しい時代の上に、古い姿の幻を、濃く浮べてみました。舞ひ處に焚く櫓のいぶりに、眼を勞し乍ら、翁の語りや、あるかなしの腫を垂れて歩く巫女上臈や、幾らとも知れぬ鬼の出現に、驚きつゞけて居ました。これが、ある時代、神遊びの一つとして、廣く行はれた時代を思ひ浮べようとする努力感が、心を衝き動かさずには居ませんでした。けれども、一つ／＼が、今におき、問題として竝んでゐるばかりです。

其ほど複雑な、渦巻き返す夢の様な錯亂と、在所々々で特殊化の甚しくなつた神事藝能とが、其後も常に同行と遇んだ早川さんの手で、こんなに鮮やかに組織せられたのを見ますと、嫉ましくさへ感じます。

でも、早川さんは、當然酬いられたのです。唯一人の旅人として、村から村へ、木馬キバの道

や、棧道カケハシを踏み越え、禰宜ネギからみようと、宿老トキノ・老女トメの居る屋敷と言へば、新百姓の一軒家までも尋ね入つて、重い鈍い口から、答へをむしりとする様な情熱が、組織を生んだのです。もつとえらい事は、秘し隠しにせられた紙魚のすみかになつた傳法書や記録を、ひき出して來られた事でありませう。

其結果は、我々の知る限りの神樂以外に、ある時代・ある地方から宣布せられた、一種の神樂があつて、其方式や、目的の點に於て、從來學者の定説變改を促す含蓄のあるもの、存して居た事が、見出されたのであります。

數十百度、此土地の方言どほり、らんごくな山の家に寝返りし、自身は、稗の飯・切りこみ汁に腹の損ふ事に甘んじて、都會の優雅な人士に、枳餅や、茸の胡桃あへなどの珍味を齎して還つて來られた、とでも言ふべきであります。

而も早川さんは、最よい指導者と、美しい心の擁護者とを持つてゐられました。前者は、私ども共同の學問の父たる、日本民間傳承學の祖たる柳田先生であり、後者は、志篤い、

學問の本宮へ詣る間もない忙しさから、人をして代參の禮を致さしめようとする澁澤敬三さんであります。

柳田先生より受けた方法を守る爲に、探訪記の範圍を出ようとせられなかつた。此事は、今の學問のさい、衆、豈夫、之を能くせむや、と言ひたい。而も、其記録は、結論を言ふと等しいまでに、賢明な配列法をとられてゐます。柳田先生の方法上の一つの理想は、茲に完全な姿を顯したのであります。

澁澤敬三さんは、早川さんの學問を遂げさせる爲に、又其記録を公にさせる爲に、述べ難いまでの奇特心を發起せられました。さうして其間に、自身亦、花狂ひの一人と呼ばれるまでの情熱を持つ様になられたのは、世間に名を掲げる金持ち趣味や、檀那檀那かたぎの道樂を超越した、晴れやかな志を示してゐます。

早川さんは、師匠に、擁護者に、得難い人を並べ得ました。だが今一つ、なくては寂しい學友の、一人として學問の感觸を温めてあげる者が無い事であります。此は、日本の民俗學

が、まだ新らしく、おれが／＼の學者に充ちてゐるからだ、と思ひます。私なども、友人でありながら、早川さんの爲のよい友人としての誇りの持てない不心切な心で居ます。此後もつと、探訪と實感と論證とに、互ひの勵みをつけて行きたい、といふ氣になつてゐます。其は、「花祭り」を讀まして貰ふ感謝からばかりではありません。此研究の、形をとり出した始めから、早川さんの後について來た久しい歩みの跡をふりかへる事が、りくつづくめの、中年の同門の盟友としての感情に、止つてゐられなかつたのです。さう言ふ峻られる様な情愛を以て、此本の解説であり、一異見ともなる様な文章を書きました。

私の此文章が、必しも花祭り及び山の神樂カケラの本義を説き得て居ないかも知れません。私自身すら處々、既に轉換を欲する固定した考へ型に入つたものもあります。あやふやな點の著しくなつて感じる部分も、可なり悟つてゐます。併し其も、今日から後の私サキの爲にも、早川さんや私より後の研究者の爲にも、みじめな足場位には、役立つだらうと思ひまして、目を瞑つて、大方の前に暴す事としました。

山の神人團體

問題の土地

花祭りを行ふ村々は、早川さんの、細密な報告が既に明らかにして居る様に、北設樂だけでも二十ヶ所ばかりあります。其外、境を接した、南信州の一部・北遠州天龍沿ひの山間にも數ヶ所はあります。どこからどこまでは、どの字アヤが出て来て舞ふものと、舞ひに出て来る字もさまつて居ます。つまり、一種の太夫村とも言ふべきものがある訣なのですが、どうしてそんなものがあるかは、何故、こんな行事が三河の山間にだけ——恐らくは——残つたかの疑念と關聯して、自然訣つて来ようと思ひます。

三河の北東の山家は、まことに興味の多い土地です。南・北設樂郡を中心に、信・遠の國境一帯の山間には、昔に花祭りがあるばかりではありません。色々な民俗藝術——主に私の謂ふ藝能に屬するもの——が残つて居ます。何故こんな土地に、そんな藝能が残つたかは、我々の仲間で、一つの問題でした。昔も土地の學者で、設樂と言ふ地名から、設樂舞シカラマヒを聯想した人もあつた様です。志多羅神を持つて歩く人——つまり、神を送る人達が、亂舞する、それを設樂舞と言つたのですが、何にしても、此は平安朝のものなのですから、あまりに時代が遠すぎ、繁りが薄い様です。私は、設樂といふ地名には頓著なく、此花祭りの入つて来た時期を漠然と考へて見ます。

備兵の村

私の考へは、二通りあるのですが、此考へは當然一致すべきだと思ひます。一つは、三河の山奥に備兵の村——同時に神人や山伏・聖の團體なる——があつて、こゝから多くの人が出かけて行つて、諸方の武家に力を貸した、其落ち残りが花祭りの村々であると、かう考へるのです。勿論、今ある村々が、皆昔からの村々だとは言へないでせうが、大體、さうした古い姿が、傳承の心シンになつて居るとだけは言はれます。どうしてそんな村が出来たか、三河の北東の山間は、前に、三河・尾張・美濃、三个國の平野を受けて、一種の呪法に

與る人達の住むのに適して居たからです。彼等は、同時に傭兵ともなりました。此等の村々が、大昔から居つたとも思はれません。或時代に、諸國を廻り歩いて居たものが、地理と生活の交渉からこゝに屯する様になり、其が分派しました。其又後に來た者も、同じ様に住みついて、村々が出來たのだと思ひます。

日本には、國家意識のまだ確定しないほどの大昔から續いて、澤山の神人團體が漂浪して居ました。一種の宗教的呪力を持つて諸國を遊行し、其力で村々を幸福にもし、呪ひもした、後の山伏團體の様なもので、彼等は、時代々々の色合を受け、當世の宗教に近づいて行つた爲に、多少の變化は見せて居ますが、本來の精神は、殆變らないで、かなりの後までも、藝能と呪力とを持つて、旅を續けて居たのです。

此形式が、はつきりと言へるのは、鎌倉時代からですが、或種の武家によつて眞似られてゐます。つまり、武家の本領を失うたものや、又は庶流の者などが、部下を引きつれ、土地を求めて旅に出たのが、遊行神人の生活法をとつて、村々をおびやかしたのです。らつば・すつば・すり・がんだうの様のものが、其から出て居ます。

武家・非御家人の旅に出ると、共にさうした行儀を行ひ得たと言ふには、理由があります。昔の武家は、皆一種の、或地方共通の宗教を持つて居たので、自然、神事を中心となるべき儀式も心得、其に附隨した藝能も出來た訣です。彼等は、村・國を祝福する藝能を行うて、人心をひきつけた様です。

併し、彼等の爲事は、それだけではなかつた。傭兵となつて、戦争にも參加しました。昔は、戦争も一種の神事だつたからです。法力の戦争から、實戦にまで與る様になつたのです。

此らの人達は、大抵、地方の武家・豪族の家に寄食人の形で止り、其まゝ居着いてしまふ者もあり、用事がすむか、不都合があれば、また新しい土地を求めて旅へ出るものもあり、時には、保護を受けた家を倒して、其土地を奪つたのもありました。鎌倉以後、戦國の後までも、さう言ふ漂浪團體が少くありません。

譬へば、後北條早雲なども、此様式で旅行をした様です。彼の動き出した初めは、宇治の奥、田原から起つて、山城・伊賀・伊勢・近江の一部に跨つて居ます。嫡流は伊勢の關にあ

つて、其岐れが宇治附近に居たのでせう。其で伊勢新九郎など、稱したのだと思ひますが、彼が最初に連れて出た部下は、極僅かで、何れも宇治附近の地名を名乗つて居ます。彼が藝能を持つて居たかどうかは訣りませんが、兵力は持つて居ました。それで、最初今川氏に憑り、後追々と勢力を得て、遂に小田原までおし出して行つたのです。少數の團體を組んで歩いて、どうしてそんな勢力が得られたかを、歴史家は疑問にして居ますが、これは、旅から旅を續けて新らしい土地を開いて行く。昔ながらの様式です。元々、彼等には傳はつて居るものがあつたから出来たのです。

山のことほぎ

かうして漂泊を續ける形の神人も昔からあつたのですが、其よりも、神人としては、常に奥山家にあつて、時をり里に下りて來るのが古い形なのです。山の神に仕へる神人で、此を山人ヤマヒトと言ひます。

山人と言ふと、後には、鬼・天狗を想像し、又、山男・山ヤマをヒトなど、も言うて、蠻人を考へ

る様にもなりましたが、決して、さうした妖怪でも、先住民族のあとでもない様です。鬼と考へられた道筋は、後の説明で、訣つていたゞけるだらうと思ひます。

山人が山の妖怪らしく考へられたと同じ様に、山姥も山の女怪と信じられる様になりましたが、此は、山の神に仕へる巫女で、うばは、神を抱き守りする職分から出た名で、小母に通じるものです。これが後には、神の妻ともなるのです。

設樂の山間に屯した一團は、此古い形を守つたのだと言へます。併し、だから彼等は、餘程古くから居たらうなど、は申されません。彼等は都合で、平野にも奥山家にも出入りをしたので、諸國を巡り歩いて居る中に、一つを中心地として、此、美濃・尾張・三河の平野を控へた、設樂の山間に屯する様になつたと見るのがよい様です。其選ばれた理由の一つには、天龍の水を考へに置かねばなりません。

かうした山人と言ふのは、常には里との交渉を絶つて居ますが、歳暮・初春には、檀那の家や村をことほぎに下りて來ます。冬の祭りの、鎮魂法を傳へた山舞を行ひに降りて來るのですが、それが終れば、また行方知れずの様に山へ歸つて行きます。里人に氣づかれな

い様に、道を迂廻するのです。「隠れ里」の傳説は、其から起つて居ます。私は、田峯を訪れ、遠州の奥山に田樂の見學に行つて、つく／＼村へ出入りの地形の似て居る事を感じました。うっかり海道を行つたのでは、容易に氣づかれない様なところに、人里が出来て居るのです。山人としての祝言職を持つた人達の根據地は、大抵さうした隠れ里にあつた様です。

冬祭りの古義

山人の里へ下りて来る年の暮は、古くは霜月シモツキでした。三河に残つてゐる花祭りも、今は正月に行ふ所が多く、所によつては十二月にも行ひますが、元はやはり霜月の行事でした。霜月の極限がしはつて、——極限と言ふ事——其をしはすとも發音したのです。古代には、師走といふ月があつた訣ではない様です。

此冬祭りの日に、彼等は里近く降つて、鎮魂マコトをしました。山姥が、山姥の舞を舞ひ、山人が、山の神に扮して舞うたのです。其場ニハが、いちと言はれました。「市」の古義です。

此たまふりに来た山人のみやげが山づとで、此を里のものと交換して行つたのです。山姥が市日に来て大食をした話や、小袋に限りなく物を容れて歸つた傳説は、其から起つたと思ひます、古代に市といはれた處が、大抵山近くである理由も考へられませう。そこで物物交換が行はれたのです。

冬祭りに就いての私の考へは、他の場合に述べて居ります。ふゆは魂マタふゆの意から出て居るとするのが、私の考へであります。ずつと古代には、春祭りと刈り上げ祭りとは、前夜から翌朝まで一續きの行事でした。其中間に、今一つあつたのが冬祭りです。ふゆまつりは鎮魂式です。家長・家屋などの祓をした後に、よい呪詞を以て祝福する。此呪詞が、冬を轉じて若春にするのです。春になれば、其一年間の村の行事の祝福と豫行とをして、山野の精靈たちのみせしめにします。

此祓のすんだしるしに、山人の持つて来た山づとを家の内外に飾り、身にもつけます。淨められた村人は、神の物となつた家内に、忌み籠るのです。此が正月飾りの起りで、山かづら・羊齒の葉・寄生キョウシ・野老トコロ・山藍・葵アオイ・樵カハツ・山桑ヤマクサなど、何れも山づとと見られるものです。

山人の杖

此山人が持つて来るもの、中で、最考へねばならぬものは、そのついて来る杖であります。大きければほこと申してよろしい。ともかくも、杖を山人が里へ残して行きます。此で地面を搗くと、土地の精霊を壓へる事になるのです。むつき・うづきは、そんな事に關係のある語ではないか、と私は考へてゐます。

むつは「むちうつ」と同義語です。むつ・うつ・むち・うち、すべて同じ意を持つた言葉です。むつきに就いては色々な説明が行はれてゐますが、月を聯想するから訣らない事になるので、元、月には關係のないものだったのでせう。きさらぎ・やよひ・しはすなど、同じ様につきはつかかなかつたのだ、と思ひます。

正月に關係のあるもので、卯杖・卯槌など言ふものがありますが、此は、元は地面を叩く道具だつたと思ひます。此行事は、今は小正月・山の講にも行ひますが、多くは、玄猪の夜に行ふもので、土地の精霊を壓服して廻る儀式だつたのです。後には、精霊は地中に

潛む、と考へた事から、土龍^{モツ}などを想像する様になりましたが、此を打つ木がうつぎでした。中がうつろだからうつぎ(空木)と言うたとも言はれますが、昔のうつぎが今言ふものであつたか、どうかは訣りません。とにかくにうつぎと言ふ木はあつたのです。其考へが變化して、うづち・うづゑになつたのだと思ひます。

此、地を打つ行事は、歳暮・初春とは限らなかつた。五月田植の前にも、壓服する必要がありました。初春に行うた事を、更に効果がある様に、もう一度くり返すのです。四月のうづきも、やはりむつきと同じ意味だと思ひます。言海風の説明は、もう改めなければならぬのだと思ひます。

はなうら

山人の持つて来る杖には、大體さうした意味がある様ですが、尙、其さきの割れ方・裂け様で、來年の豊凶を占ふ、と言ふ意もあります。其をはなと言うたので、はなと言へば、後には木や草の花だけに觀念が固定してしまひましたが、ついで起るべき事を、豫め似た

形に示すのがはなです。で、此杖は、根のあるまゝのものを持つて来て地面に突き挿して行く事もあります。根が生えて繁ることを待ったのです。根のないものでも、桑などは根の著き易い木です。祝詞にも、「いかし八桑枝ヤグハエの如く」など、あります。一夜竹・一夜松の傳説は、此から起つて居ます。

ともかく、杖の信仰は、我國の生活に、大きな影響を與へて居ます。形状も段々に變つて來たので、ほんとうの杖である事もあり、ほこである事もあり、或は御竈木ミカマキにもなり、又、先の割れたのを主とした、削りかけ、削りばなの様なものにもなつたので、其極端に短くなつたのが、削りかけの鶯ウです、鶯換へは、天満宮の行事になつてゐますが、菅公に必然の關係がある訣ではないでせう。地方で、天神様に祀つたので、其から關係がついたのだと思ひます。

此杖の一種が、今でも、信・遠・三の奥山家には残つて居ます。年の暮・小正月の前夜に、家の入口納屋の入口などに薪を立てるので、此をおにぎともおにぎともにゆうぎともゆうぎとも言うてゐます。今では家人が御祝儀に立てるのですが、其に祝福の意味がある事だけは忘れないでゐます。

おにぎは鬼木でせう。こゝの鬼は、尙後で述べます様に、決して惡鬼羅刹ではありません。たゞ巨人といふだけの古い意義を止めてゐます。此鬼木にも、山から來る不思議な巨人が持つて來ると考へた印象のある事は、十分感じられます。

にゆうぎは、若し此が、丹生ニフ(壬生)から出た言葉としたら、其は非常に古い言葉なので、どうして此が結びついたか、不思議だと思ひますが、にふはみそぎにふはみそぎに關係のある語で、禊ぎをしたしるしの木といふ事になります。あまりに古い言葉で、疑問ですが、どうも、其以外には意味の持つて行き所がない様です。

とにかく、年の暮になると、山から不思議なものが來て棒を残して行くと信じた古代の信仰が、そんな形で残つて居るのです。

常には奥山家に隠れてゐて、時あつて里を訪れる神人が、古くから我國にあつたのが、殆ど空想化されてしまつて、山人を妖怪と考へるほどの後になつても、尙それを學んで、年毎に山を下りて來る人があつたのです。此が三河の山奥に花祭り行事の残つた一つの原因だと考へるのです。だが、此様なものは、必ずしも設樂の山の中にだけあつた訣ではない

でせう。恐らく外にもまだあつたらうと考へられますが、其が、特に設樂にだけ残つたのは、彼等が戦國時代に力を貸した檀那の家々が榮えて、其保護を受ける事が出来た爲だと考へて見る事をまづ正しいといたします。

併し、現在の花祭りが残つた原因は、單に、其だけではない様です。他に、まう一つ原因があると考へられるので、それは割り合ひに、新らしいところにあると思ひます。

近世に於ける移動

伊勢神樂の影響

私は、最初花祭りを見ました時には、以上述べて来た様な事を心に浮べて、單にそれだけの興味と、一種古風を尊ぶ氣持ちとで此行儀を見て居たのですが、尙度々見續けて行きますと、其うちには、割り合ひに近世らしい移動のあとが見られます。どうも此には、皇太

神宮の信仰を持つて歩いた人の、運動が入つて居る様です。

此信仰を持つて歩いた人は、相應たくさんありました。其藝能は神樂でした。神樂藝能には、最後に獅子が出て解決をするので、段々此が中心になり、今では、神樂と言へば獅子頭を想像する様にさへなりましたが、恐らく此にも幾度か變化があつたのだと思ひます。私どもが知つて居る一番新らしいものは代神樂です。此は色々に聯想が重つた爲に、今では殆ど、訣のわからないものになつて居ますが、代神樂と言つたのは、代參の意味と、寺方で謂ふ永代經讀誦の意味とがあつたのだと思ひます。つまり一種のきよめはらひに村を廻つたので、皆が伊勢へ行つて淨めて來なければならぬのを、彼等が廻つて來て、代りにみそぎをしたのです。禊ぎと禊には區別があるので、禊ぎには水の關係がある訣ですが、早くに此區別は忘れられてゐます。とにかく、彼等が廻つて來て、伊勢へ參る代りに、其土地でみそぎをして行く。其土地でもやり、また伊勢へ歸つてもやつたのです。其しるしに、衣服・髪、其他色々なものを持つて歸る。此が彼等の收入にもなつたのです。だから、代神樂の社にあるのは間違ひです。さうして、此功德は永代に及ぶと考へたらし

い。代々神樂は、永代神樂と言ふ事らしいと思ひます。

伊勢に限らず、熊野神明の信仰を持つて歩いたものなどもさうですが、時代によつて色々な形で傳はつてゐます。室町から江戸へかけて評判になつたものでは、伊勢踊りがあり、それが新らしくなつて伊勢音頭なども出来てゐます。

伊勢踊りと神樂と同じものであるかどうかは疑問ですが、伊勢の神樂は、今の代神樂だけでなく、もつと古い形式のものが幾つかあつたに違ひありません。一昨年、三越呉服店で催された「伊勢詣での會」の出品中、神樂の書止めがあつて、其に、まどこおふすまの繪があつたと言ふ話を北野さんから聞きました。私は遂にそれを見ないでしまひましたが、天蓋の様な形をしたもので、其を垂らすと、すつかり姿が隠れてしまふ、事になるのだと思ひます。眞床襲衾マコトツツミが蒲團の様なものであつたのは、極古代で、後にはそんな形になつたのです。此が伊勢の神樂に入つたのが何時であつたかは、一寸想像もつきません。又、後の神樂もそんなものはない様ですが、確に或時代には其があつたらしいのです。其を想像させるものが、設樂の山奥に傳はつた神樂の中にもあるのです。

設樂神樂の輸入者

早川さんの調査によつて訣つたのですが、こゝには元、三日三夜に互る神樂があつたので、現在の花祭りは其一部分であると言はれてゐるのです。神樂に關しては、其後段々書き止めなども出て來たので、其がいつ時代に入つたかは訣らないが、とにかく、今民間に傳はつて居るどの神樂よりも古い、と言ふ事だけは言へ相なのです。併し、現在の花祭りが其一部分であると言ふのは問題で、果して神樂が最初から此を含んだまゝ、三河へ入つたのか、以前から、此行事が山間にあつて其が神樂に結びついたのか、三日三夜に互つた行事が一夜に短縮されたと言ふのは、其重要な部分だけを行ふ様になつたのか、此は、容易には解決の出來ない事ですが、私は、今のところ此二つを別種のものだと見て居るのです。

とにかく、我々の知つて居る、今の代神樂よりは幾代前かの神樂でせう。其を持つて此山間に入つて行つた人があるのです。此地方でも、漠然と其人を想像し傳へて居るので、其をみるめ様又はきるめ様と言つてゐますが、みるめ様はそんなに古い人ではないと傳へて

居る村もあります。私も見て來ましたが、坂宇場(豊根村)の神樂屋敷の庭には、其みるめ様の墓と言ふのがあります。又、曾川(豊根村古真立)には變つた傳説があつて、此を持つて來た人を二人だと言ひ、山伏の様に言つてゐます。此を二人と傳へるのは、神樂・花祭りを通じて、みるめの王子・きるめの王子といふのがありますので、其から二人と言ひ出したのだと思ひます。勿論こんな事は信じられません。或時代に有力な人があれば、死後の假想から、家も墓も出来る訣です。だが、此傳説で見ても、これの入つて來たのが、そんなに大昔でないと言ふ事だけは想像出來ます。

結局これは、山人の職業を、其後幾度か人が變つて受け継いでゐる中に、最後に太神宮の神樂が入つて來た。さうして以前からあつた花祭りを習合する様になつた、かう考へて見るのがよい様です。其を、山人が習つて來たか、別に持つて入つた者があつたか、其入つて來たのがいつ頃であつたかと言ふ事は、もう訣らないと思ひますが、大體伊勢の神樂はそんなに古いものではないのです。何故ならば、神樂といふ名の行儀が元々伊勢に起るべきものではないからです。八幡の神樂などに比べれば、かなり新らしいと言へます。此の

入つて來た年代も、さう古い事ではないでせう。さうして、傳説に従へば、他から持つて入つたものがある様だとだけが考へられる訣です。

物の中に入る儀式

此神樂で、先注意しなければならぬものは、伊勢の神樂の眞床襲衣にあたるものを、こゝでは白山シラヤと言ふらしいです。此に這入つて生れ出る式があつたのです。此亦早川さんの聞き出された事なのです。

これも、後にそんな理くつがついたのかも知れませんが、ものが生れ出る時には、すべて裝飾を眞白にしなければ、生れ出ないと考へたのです。我々の辿れる限りでは、産室は眞白でした。八朔には女が白無垢を著しました。此に就いては、北野さんにも既にお説がありました。後には遊女だけに残つたのですが、此は神事に與る女は皆行つた様です。つまり成女戒前の物忌みのしるしで、女となつて生れ出る式ですから、産室を白くした様に、白無垢にくるまつたのです。

白山と言うと、すぐに越の白山が思ひ出されます。あの山をなせ白山と言うたかは訣りません。語原を同時に、三つも四つも考へるか、一つの語原で説明するかは、此からの學問の岐れ目だと思ひます。とにかく、此山を白山と言うたのには何か由來があつたと思はれますが、一つの聯想は此山に菊理媛を祀つたとある事です。此神は、泉平坂イモフヒラサカに顯はれた神で、伊弉諾神が禊ぎをする前に顯はれてゐます。其から考へて行くと、菊理キクリは泳で、禊ぎをすゝめた神らしく思はれるのです。白山に祀つた神が、果して菊理媛であるかどうかは訣りませんが、併し、此神が白山の神になつたのは、産湯禊ぎの後、生れ變ると關係のある、白山シラネの聯想からではなかつたでせうか。

山伏の行作の中に、あつたらしい石こづみについて言ひます。こづむはたゞのつむではありません。海岸などに、波で堆く寄せられた物を木積と言ふ様に、石の中へこづみ込むのです。此が後には春日の十三鐘の様な傳説を生む様になつたのですが、此は、山伏行作の中にそんな式があつたのだと思ひます。其も單純に、山伏の私刑などと考へる事は出来ません。魂を身に著ける、復活の儀式として行はれたのが最初の様です。茲で聯想される

のが、謠曲の「谷行タニカウ」です。此をたにかうと讀んだのには意味のある宛て字だと思ひますが其に就いて申す事は今は控へませう。たゞ、此は山伏の死んだものを谷に棄てる事だと考へるのは、却つて謠曲から出てゐる考へで、其よりも、松若が後に復活をしてゐる事に注意すべきだと言ふことだけを言へばよろしい。要するに、眞床襲袈に於けると同じ様に、もの、中に入つて、完全に魂の身にくつつく時期を待つたのですが、石の中には入れぬので、石を積むで其中に入つたのだと思ひます。

成年 戒

つひ先頃、豆州の穂積忠さんから聞いて非常に興味を唆られたのですが、伊豆の海岸には、まだ著しく盆がまの風習が残つてゐる相です。盆がまと言ふのは、成女戒を受ける前の女兒が物忌み生活をした遺風で、まゝごとの起源でもあるのですが、こゝでは、大小二つの竈カマドを作つて、小さい方を家の外へ出して置くのださうです。此に似た風習は、男の子にもあります。東北では、かまくらと言つて、小正月に雪の洞窟を作つて幸の神のお祭りをし

ます。

かまと言ふ語はどこまで遡れるか。かまとは釜をかけるからと言ひますが、其では訣らないと思ひます。洞窟の事を、かま。がまと言ひますが、がまは多く水邊の洞窟を言ふ様ですが、其には限らないと思ひます。これにもやはり、洞窟の中に密閉して置いて、或時期が來るといふ風習があつたのではないでせうか。盆がまなども、一緒に飯を食べるといふこと、一緒に籠るといふこと、二つの意義がある様です。伊豆の話の、竈を二つ作ると言ふのは、大きい方が籠るかま^{コモ}で、小さい方が飯を炊く竈ではないかと見當を立て、ゐます。かまどのかま^{コモ}と洞穴のかまとは、元は同じだつたかも知れません。併し、かまど。くど。ほど、皆少しづつ、違ふ様です。とにかく、かまから出ると、復活の形になるので、洞穴に入るのも、山を作つて入るのも、同じ事だつたのだと思ひます。

此山が後には變化物に据ゑる作り物や、道成寺の鐘にまで變つて來たのですが、かう考へると、設樂神樂のしら山の事がかなりはつきりしてくる様です、眞床襲衾が天幕の様なつた訣で、神樂の方では、此白山から出て行ふ作法を重大なものとして、うまれきよまり

と申しました。きよまりはきよまはりで、自然、うまれの元の形は、ゆまはりだつたらしいのです。物忌みをして淨める事だつたのですが、白山の聯想から生れ出るを考へて、うまれとつける様になつたのではないでせうか。此行事は、七八十年前に全く跡を絶つてしまつたのです。この行事の意味はよく訣るので、つまり後の代神樂と同じ事になるので

花祭り行事の主なる問題

花祭りを行ふ人々

話は愈花祭りに入りますが、現在行はれて居るものを見ますと、純粹に花祭りだけを行つて居る所、田樂を兼ねてゐる所、更にまう少し不純な藝能を兼ねてゐる所などがあります。花祭りを行ふ主なる人を「花禰宜^{ネギ}」と言つてゐます。禰宜は神主の事ですが、別に、もと

山伏であつた者が行つてゐる村もあります。山伏であつて、同時に京の土御門家に納金をして陰陽師になつた者がやつて居るのです。花祭りをやるのには、其だけの資格が必要だつたのです。

處がこゝに、一つ違つたと思はれるものがあります。京花園の妙心寺派に屬する、行者なる一種の奴隸宗教家——念佛聖の様な者で、禪宗の方での名——のやつて居たのがあつたらしいのです。まだよくは訣らないのですが、黒倉といふところは、田樂をやるものだけが住んでゐるので、田樂が主になつてゐます。此村の様子を見ますと、どうも妙心寺に屬する行者らしいところがあるので、妙心寺と土御門家との、兩方に關係してゐたのかも知れません。此事は、一度妙心寺に行つて調べて來たいと思つてゐます。さすれば、舞人・宮人などと言ふ名稱の存外な語原から出てゐたのを知られさうです。要するに、禰宜・山伏に限らず、宗教家の資格を持つてゐたものであれば、どんなものでも、やつて行けたのでせう。

此を行ふ人達は、村の中の小名ともいふべき部落に居つて、他はすべて其をうける形です。

どこでも、かうした藝能を持つた部落は、大抵村のはづれなどにあり、他から特別な扱ひを受けた事から、地方によつては、特殊部落だと思はれる様になつたものなどもあります。幸ひこゝでは、さうした事がなく、全く關係のない他の村からも頼まれて出かけて行く様な事が頻りにあつたらしく、平坦部近くのもの、殊に其が多かつた様です。譬へば田樂を兼ねてゐる、古戸・小林などの花は、南、北設樂のあちこちに頼まれて出かけた様でした。

行ふ場所

第一に申さねばならぬ事は、以前は此が霜月に行はれた事です。昔は、霜月が月の終りで、其極限がしはすであると申して置きましたが、斯様に十一月・十二月の區別のなかつた頃の習慣は、曆が出来て師走といふ月が出来れば、當然師走に行つてよささうな行事を、やはり霜月に行つて、不都合を感じなかつたのです。時代が經つと段々實感がなくなるからです。さうして其が翌年の祝福になつたのです。

明治になつて正月に行ふ様になりましたが、此は、偶然ながら當を得た事になつたのです。此行事を行ふ場所は、村によつて違ひます。社の境内でやる處と、毎年場所をかへて、家で行ふ處とがあります。此は家々で行ふ方が古いと思ひますが、一概には申されません。可なり古い形式と思はれるものが社で行はれてゐるものもあります。斷定的な事を言ふのは暫く控へたいと思ひますが、社で行ふのは、恒例通り社で行うといふ考へが生じてからだと思ひます。神樂でも社でやつたとは限りません。神事だから社ですと言ふのは、常識的な考へです。とかくは、此を行ふ場所は二様あるので、其は、禰宜花と法印花とで違ふのでもない様です。

家で行ふ時には、今では戸をはづす位のもですが、昔は、壁もしたみ板も全部とり拂つて、吹きさらしにしたのでした。此家を舞ひ屋といひ、入口の土間を、舞ひ處(舞戸・舞土とも)と言つて、舞を舞ふところにあて、其中央に釜を据ゑるので、釜の据ゑ方には、やかましい方式が言はれて居ますが、此は陰陽道の式に勝手に考へ出した事です。釜の上に湯ぶた——つまり天蓋です——を下げ、其から四方に紙で作つた綱を渡すので、其うちの

筋を神道といひ、此はかん座前の梵天に通じて居るのです。

家の設け方に就いては申しますまい。上り框を上るとそこがおへで、其奥が奥座敷で、鬼部屋になるのですが、納屋になる事もあり、舞ひ役者が仕度をする處です、おへは、かん座と言つて囃子の座になります。かん座は、三河の方言では解釋出來ない様です。上座でもない様です。そんなに古い言葉だとは思はれませんから、或は神樂などの持つて來たものかも知れません。今は、笛・太鼓の樂人と、村の主なる人が坐りますが、昔は檀那衆が控へた處でせう。

舞ひ處で行ふ事は、其威力が村全體に及ばねばなりません。此が花祭りの精神で、同時に日本固有の藝能の精神を傳へて居るのです。三番叟などところ繁昌の爲に踏んでゐるので、村全體を廻る事は不可能ですから、其中心になつて居る處で行ふのです。だから、其威力が村全體、國全體に及ぶ様に、壁もしたみも取除いて吹きさらしにするのです。

中心行事

花祭りの中心になつてゐるものは色々あります。神樂と習合した事から、一層複雑になつたのだと思はれますが、現在行はれてゐるものを見てゐますと、其中心になつてゐるものは反閉ヘンバイです。三河では、へんべへんべと云うてゐますが、此は、昔から、陰陽道の方でやかましい方式で行つてゐるのですが、反閉の本當の精神は、陰陽家のやるものではなく、その家の主人がやるべきものだつたのです。即ち、居所を離れる時に行ふ式で、天子から貴族・將軍・大名にまで及んでゐますが、いづれも其主人が行ふのがほんとうでした。後になると、主人がお出ましになる時、家來が掛け聲をかけ、力足を踏みます。尊い人とお通りになるのだから悪いものに逃げよと豫告をするのです。其力足の方が、陰陽道にとり入れられたので、陰陽師の反閉となり、かけ聲の方は警蹕になりました。

一つの假説ですが、此警蹕の聲は、家々で皆違つた様です。さうして、それが尊い人の名前にもなつたのだと思ひます。日本紀に、「天壓神來アマノオシカミ」とありますが、あ行とわ行とは、遠い様で、實は日本音韻學上もつと關係の緻密だつたかとも考へてゐます。壓神のおしは或は後のをしでおし／＼と云うて來られた神様だつたのではないかと思ひます。平安朝に

なると、天子の先拂ひはをし／＼と云うてゐます。此假名の違ひに就いては、もう少し音韻の研究をしなければならぬと思ひますが、つまり、警蹕の聲で、誰が來るか、訣つたのでせう。さうして悪い精靈を追拂つたのだと思ひます。反閉の踏み方にも、色々種類があつたらうと思ひます。いつのをたびふみたけふなど言ふのが其でせう。現在行はれてゐるものにも幾通りかありますが、此は陰陽師が勝手に方式を作つたと思はれるものが多いので、此から古い形を還えして來ることに望みないと思ひます。

花祭りでは、此反閉を、主に鬼が踏みます。此が一つの中心行事になつてゐるので、もう一つは、花の行事（花の唱文、花の言ひ立て、花の舞など言ふのがあつた）、總括して假りにこんな言葉で言つて置く）であります。此二つが行事の中心になつて居て、其外に添加せられてゐるものがあるのです。此を行ふ人の來歴を語る事で、同時に其は、行事の由來を説く事にもなるのです。先此三つが花祭りの主なるものと見られます。只今では、反閉だけが中心の様になつてゐますが、嘗ては物語りの盛んだつた時代もあつたと思はれます。

花の行事

花祭りの花は、花の行事から出てゐると思ひます。はなと言ふのは、なりもの、前兆を示す、一種のさきぶれの事です。木の花・草の花は其一部分で、なりもの、前ぶれになるものは、すべてはなと言つていゝのです。だから、はなが顯れないのは、穀物の成熟不成熟を示す重大な前兆になるのです。同時に、此はなは、成年戒とも関係があるのですが、此方は殆ど忘れられてしまつて、今では、穀物だけの関係を考へてゐる様です。成年戒の方は、神樂の中心行事になつて居た爲に、神樂が衰へると共に忘れられてしまつたのだと思ひます。

日本の古い信仰では、花に就いては、始めと終りとの二つを考へてゐました。育てる事、いゝ花を咲かす事、むだに散らさない事、此が非常に大切な事だつたのです。春の花が早く散れば田のみのりが悪い兆と見、人の身に譬喩しては、悪疫流行の前ぶれと考へたものです。なるべく花を散らすまい、と願つたのです。此が、鎮花祭の起りで、平安朝の初め

頃から愈盛んになつたのですが、奈良朝には既にあつたのです。併し、平安城にも奈良都にもない神を祀つてゐるのですから、恐らく其以前からあつたのでせう。

やすらひ花のやすらひは、「やすらへ」といふ命令で、花にくづいしるの意で、散るのをまつて落ちついて居よといふ事なのです。

鎮花祭では、此點が頗る重要なのですが、三河の花祭りは、此方面には、深く関係がない様です。此関係があれば、もつと田樂に結びついてゐなければならぬと思ひます。田樂との関係がもつと深ければ、熊野田樂、切目王子などの存在から紀伊神明の宣布の痕を辿る事が出来るのですが、今のところまだ、其は出来ません。

三河の花祭りは、花育ての方が主になつてゐるので、同時に其は、花の占ひにもなるのです。此行事は、古い藝能では、延年舞の中にあります。露拂ひの出た後で、花の稚兒と稱するものが、花の枝をもつて出て舞ふのですが、三河でも、此行事は大抵子供がします。だから、花祭りは、延年舞と同じものだといふのではありません。並行して行はれてゐる中に、一方は發達をして固定し、一方はそのまゝ續いたゞけです。とにかく、花育ての行

事は子供がするものになつてゐる様ですが、或はそれが若者であつたかも知れません。日本では、赤んぼから子供になる——袴著は禪をつける式である——のと、子供から若者になる——元服——のと、成年戒と準成年戒と二度も繰り返して行ふので、花の稚兒の舞ふのは、其形だと思ひます。さうすると、白山の行事とは二重になる訣ですが、そんな事は、民族論理の上から當然あるべき事なのです。

併し、田舎の人には、うっかりした事は言へないと思ひました。一昨々年ある村の花祭りを見學に行つた時、その總代たちに聞かれて、花祭りの花は、翌年の穀物の花を占ふので、花育てが中心であらうと話したところ、次に行きますと、「成程仰言つた通りらしい。調べて見たら、花育ての花の杖に、古くは花の外に米の穂がついて居た」と言うて、早速そんなものを造つて持つて來られたのは驚きました。米の穂がついたのでは意味をなさない事になりはしますまいか。かやうに、花の占ひが大事な事になつてゐるので、其には唱言ウタコトがあつたのです。其が後に分化して、花の唱言ウタコト(或は莊嚴・唱文・總門など、も)の一類といふものがたくさん出て來たのであります。

鬼

花祭りの名まへの起りは、どうしても花育てにあつたと思ひますが、同時に、其が冬の祭りであつたので、山から山人が祝福に下りて來る印象がとり入れられてゐます。鬼の舞が其です。山人が、鬼・天狗と考へられる様になつた事は、古くからの私の持論です。後には、鬼といふと、暗い方面だけが考へられる様になりましたが、花祭りの鬼のみならず、春祭りに來る鬼には、祝福に來る明るい印象が十分見られます。

鬼の、里を訪れる機會は幾度かあつたのです。歳暮・初春の外には、五月田植の時にも顯れます。此の發達したのが田樂の鬼で、田樂では、天狗もまた大切なものになつてゐます。殊に田樂では、「四匹の鬼」と名高い演藝種目がある位ですが、四匹の鬼には意味があると思ひます。花祭りにもやはり四匹の鬼が出ます。田樂との交渉をいふ段になると、此などは、第一に申さねばなりません。四つ鬼、或は朝鬼と言はれてゐますが、恐らく田樂以前、一匹であつたのが、二匹になり、四匹になり、後無條件に殖えて來たのだと思ひます。

第一の鬼を、山見鬼と言ひます。言葉の意味はよく訣りませんが、土地では、山の姿を見て廻る。ほめて廻るもの、様に思つて居る様です。

此山見鬼と問答をする役があります。鬼——神——と問答をするのには、人間の言葉では訣らないから、通辯役が必要なのです。手草カゲサを持つのは、即ち、神の言葉を解す事の出来る、神人のしるしで、巫女が神や笹を持つものにも、其意味があるのです。猿樂能の上にも、此が残つてゐます。此點が山見鬼から分化して、神鬼といふものになりました。此鬼が出て來ると、人が出て來て、神の枝で背を打ちます。それで、神鬼といふらしいのですが、恐らく元は、神を持つて山見鬼と問答をした通辯役だつたのが、鬼の言葉を解するといふので、此も鬼にされたのだと思ひます。勿論、此は私の假説ですが、鬼の二匹になつた道筋が凡そ訣ると思ひます。

花祭りでは、此二匹の鬼が大切なものになつてゐます。其中最大切なのが、山見鬼です。此鬼が、鎮魂に來たしるしに反閉を踏む、其威力が村全體に及ぶと考へたのであります。いづれ斯うした鬼には、眷族がお伴をして來ます。これが子鬼で、今は無數に殖えてゐま

すが、元は四匹だつたと思ひます。

朝鬼(四つ鬼)は、其引上げの形を見せたものでせう。昔は、一番鶏が鳴けば朝だつたので、其時には、もう鬼が退出しなければならぬのですが、段々朝を朝日の出と考へる様になつて、朝の考へが二重になつた爲に、鬼の口に旭があたるまでには、祭りを終らねばならぬなど、やかましく言ふ様になつたのです。

つまり、鬼はあの世のものなので、夜が世界である。だから一番鶏が鳴けば、引上げねばならぬのです。殊に出雲系統の神樂では、皆鬼が悪者になつてゐるのですが、花祭りの鬼には、決してさうした處はありません。

禰宜と翁

前に言つた物語りの話になりますが、神主が出て物語りをします。其に、たゞの禰宜(又、ひのねぎ)で出てくるのと、もう一度翁に變つて出て來るのと、くり返しがあります。ひいなと稱する一種の御幣を擔いで出て來て、遠い旅行をして來た、自分の來歴を物語る

のですが、此は神樂に關係があると思ひます。つまり神主が祓ひにやつて來るので、なかにてばらひ・なかとばらひと言うてゐますが、中臣祓ひだと思ひます。

土地によつては、此を海道下りとも言うてゐます。(下伊那新野雪祭りなど)日本の藝能に、海道下りといふ一種目が出来たのは、鎌倉時代ですが。此形は、更に古くからあつたので、遠くから來た神が、其流離の道筋の出來事を語る辛苦物語りから出てゐるもので、この最發達したのが宴曲の海道下りです。つまり都から地方に下つて來た道中を語る道行きぶりです。

ところが、此物語りを翁が出てもう一度行ひます。黒式の尉で、生ひ立ちから、母の述懐を述べて、自身の醜さを誇張して笑はせ、婿入の失敗、京に上る道中の出來事などを語るのです。翁と禰宜とは、表裏になつてゐるので、一方は祓ひをし、一方は由來を語つたのだと思ひます。此翁・禰宜が分裂をして色んなものが出來てゐます。翁から媼が、禰宜から巫女が出てゐるのです。巫女を天照皇太神宮と呼んでゐる處がありますが、つまり、面から來る神聖感が、さうした神を想像させる様になつたのだと思ひます。面は、どれで

も、非常に神聖視してゐるので、此を被ると、一種の神祕な心が境に住する事になるらしいのです。それから何でも神様になつて行つたらしいのです。

面で、特に注意しなければならぬものは、翁の面の顎が切れてゐる事です。新野で寫して來た書物には顎がない様に書いてあつたが、實は顎が切れてゐるのです。つまりものを言ふしるしです。大體面を被る藝は、古くは抒情的なとき聲を出すべきでないのです。其で、語りを主とする翁の面だけが、顎が切れてゐるのです。

更に面で注意すべきは、巫女面——上臈面——などは、殆ど目の穴がないほど小さい事です。昔のものには、大きいのと小さいのとの二つあつた様ですが、とにかく、日本の藝能には不思議に、盲人を主役にしたものが發達してゐます。猿樂にも田樂にも其があります。が、恐らく此は、かうした面から起つたのだと、私は考へてゐます。

尙、花祭りの面で最大切なものになつてゐるのは、ひのを、みづのをと言はれる二つであります。此は最初から二つだつたのでなく、後に對象的に作つたのではないかとも思はれますが、其形が所によつて區々なのです。ひのをは男の様でもあり、赤い翁である所が

あり、天狗である所があり、みづのうが白尉である處もあり、うずめである所もありま
す。

どこでも此をしづめ様と云うてゐます。最後に神樂がすむと、此陰陽二つの面を被つて出
て来て舞ひ鎮める、しづめは其から出てゐるらしいのです。だが、其さへ一體の處もあり
ます。併し、此にみるめ・きるめの二人の王子の聯想が結びついて、實在の人物の様に考
へてゐる所もあり、又、ひのをを猿田彦に、みづのをを綱女に説明したがつてゐる所もあ
りますが、元は一つだつたらうと思ひます。しづめと言ふ語は、割り合ひ新らしい言葉だ
と思ひます。

もどき

翁・禰宜・巫女などが出ますと、其について多勢のもどきが出ます。花祭りではもどきが肝
心なものになつてゐるので、正式なものと、ふざけたのとありますが、翁・禰宜には、正式
のもどきが出ます。翁の言うた事を擴大して言ふのがほんとうなのですが、今では、一緒

に言うたり、本を持ち出してせりふをつけたりしてゐます。

もどきと言ふ語は、「反對する」が古いのかも知れませんが、中世の藝能では、相手方と言
ふ事になつてゐます。その外、翻譯する・物まねするなどの意味があるので、翁の通譯と
言ふ事になるのですが、時には別様の言語、動作で説明する事もあります。

私の考へでは、禰宜がもとで、翁が其もどきであると思つてゐます。三河には、まだ翁を
猿樂とする考へが残つてゐます。譬へば、鳳來寺の田樂を見ても、翁を猿樂と云うて、前
にやつた物の物まねをするものになつてゐます。都の藝能が翁を本體にしたのは、翁を本
藝とした猿樂役者が、榮えたからであります。併し、日本の藝能は、或時代、複演に複演
を重ねて來ました。こゝでも其が見られるので、禰宜のもどきが翁であり、翁にもどきが
つき、更にその複演出である、ひよつとこ面を被つたもどきが出る、あばれ廻りもしま
す。ひよつとこは關東の里神樂にもありますが、此は反對する・逆に出る方の悪い意味の
もどきになつて居ます。

要するに、翁の語りは、今花祭りの中では重要なものになつてゐますが、此行事には従と

見らるべきもので、後から入つて来たものでせう。主としては、中臣祓をしに出る禰宜が、神樂をすゝめる爲に諸國を廻つたと言ふ物語りと、山から鬼が来て山を割り、反閉を踏む霜月の行事、それにもう一つの花育ての行儀と、此三つが重つて居るので、翁の方は軽く見ていゝと思ひます。

既に平安朝の新猿樂記を見ましても、どれだけの種目があつたのか、どれが主體であるか訣らないほど、色々なものがとり入れられてゐます。由來、民俗藝術には、さうした性質があるので、あらゆるものを吸収して膨脹して行くのです。花祭りにも、色々な種目がとり入れられて、どれが中心だか、もう殆ど訣らない様になつてゐますが、やはり元は一つの中心があつたに相違ありません。たゞ、昔の人は、後に色々なものをとり入れるにしても、單に面白いからといふのでなく、何か根本的關係があつて結びついたのだと思ひます。其だけに、一層訣らないものにもなつてゐるのです。

それでも、花祭りで比較的筋目立つてよく見られるのは、田樂との關係、神樂との關係で、此三つが纏綿としてからみついてゐるのです。念佛だけは、別になつてゐる様です。信。

遠・三、此三个國の山奥に残つてゐる藝能を集めて見ますと、田樂・花祭り・神樂と言うてゐるものが、皆一部分づゝ關聯してゐて、彼等の間に取り合ひの行はれた跡がよく訣るのです。

延年舞との比較

既に前にも一寸觸れておきましたが、此花祭りと、かなり似通うて居る古い藝能を、中世のものに求めますと、第一に延年舞が思ひ浮べられます。延年舞の研究の權威は、何と申しても、高野斑山博士であります。其おかげで、非常に此方面の事が訣つて来たのです。翁の言ひ立てゝはありませんが、此際を以ちまして、斑山知章公に「御禮申す」。

延年舞は、先、大體、平安朝の末から盛んになつて来たものと見ていゝと思ひます。そして、此中心になつて働くものは、花祭りの話の中で、既に暗示を全うして置いたと思ひま

すが、やはり成年戒前の稚兒を主體として居る様です。それに對象して、遊僧と稱する一團があります。此は、村方に於ける小若衆・若衆の關係を、寺方で行つた形と言ふ事が出來ます。此爲組みが複雑になつて來ますと、女をも老體をも含んだ、田樂の様な形が認められ、更に擴張せられても來る訣です。

延年舞の稚兒は、先第一に、花の杖をさ、げて出て來る様です。その舞臺の構造が、著しく後々發達する泉殿式の舞臺とは、區別せられて見えます。それは、最適切に芝居と稱するもの、語原に、當つて居る様です。時代によつて舞臺の構へ方にも變化はありませうが、如何に後になつても、地上を舞臺として、其上に或種の敷物——所作舞臺の如き——を設けて、此を芝居と稱して居た事だけは言へます。

單に、そればかりでなく、舞臺以外に、別に山と稱するつくり臺が設けてありました。此は後には、しんめとりいを整へる爲に、左右に据ゑた様でありますが、私は、此をも初めは、一つのものと考えます。そして、樂屋と稱すべきものが、出演者の道路、即ち、橋がかりを隔て、舞臺の後ろにあつた事、そして、其謂はゞ花道を圍んで、囃子方・謠ひ手・

舞臺番などの人々が控へて居つた様に見えます。

此構造と言ふものは、能舞臺とも、芝居の舞臺とも變つて居て、延年舞が一つの典型をなすものであります。ところが、よく考へて見ますと、昔の藝能の舞臺から、泉殿式の舞臺になる以前の形を維持展開して來たものだ、と云うてよさ相です。

私どもの言葉では、門外の藝・庭の藝・泉殿の藝と、かう三通りに、藝能の格式を分ける標準を立て、居ますが、此が庭の藝の、古い形の、少くとも一つであります。

延年舞との比較は、詳しくするほどの資料もありませんし、また其だけの岐路に入る餘裕もありませんから、さしづめ入用な部分だけをとり出して、花祭りと比較しようとしたのです。併し、此を直に、花祭りの出自を延年舞だ、と主張する企てだと思はれては困ります。

花祭り舞臺の特徴

先第一に、花祭りの舞臺は庭であります。其が社の庭であるにしても、或は家の庭である

にしても、或は屋外の野天であつたらしい證據もありますが、いづれにしても座敷藝ではありません。また、もの、外側から内に向つて演奏するといふ内容も持つては居りません。其行はれる庭が、即ち、其家及び家を中心とした、土地・村・郷莊を意味するものだと考へて居ります。そして、其周囲がすべて見物の見所であり、時としては、舞臺までも見物が割り込んで來るといふ事になつて居ります。

延年の記録では、花祭りの様な亂雑な村々の祭りの作法を書いて居らぬのですから、見物と舞臺との關係を截然たる區畫のあるものと言ふ風に考へられ易く、記され、描かれしてゐます、でも、此は、かうした舞臺の性質上、後にうすべり、或は所作舞臺に似た敷板を設けるまでは、優人見物の入り亂れの行はれた事は考へられます。

まして、此に似た様式の祭りが、古い村々に行はれて居たとしたら、どうでありませうか。其、囃方や役方の控へて居る中を、花道が通るといふ事は、只今では花祭りの著しい特色になつて居ますが、歌舞妓芝居の如きも、或は此に似たものでないかといふ姿はそなへて居りました。其は、見物が舞臺の後方に、役者よりも高い位置に控へて居る、所謂羅漢臺

の形であります。が、此も羅漢臺の發生を探つて見ない以上は、只今の花祭りのかん座に見物が割り込んで居るのと、早急に一つには出來ません、唯、最延年舞の側の形が、花祭りのかん座に似てゐる事だけは言へます。さうして此かん座は、謂はゞ舞臺の藝を観る、客殿の位置であります。そして、其に控へて居る人は、祭りを執行させる擁護者、即ち、檀那、竝に其招待客及び一族といふ考へがある様です。で、さうしますと、其場合、庭の藝は、よび迎へられた藝人のすることの形になるのです。

ところが、もう一つ含まれてゐる考へを分析して見ますと、かん座に控へて居る人達は、舞臺へ出て舞ひ奏でる人と同種類の、神聖な人達と見られて居つたらしいのです。

樂屋即鬼部屋のが、其後にとつてあるといふのも、此また今日の花祭りに必ず見られる事でありまして、之はかん座の一部分を、特に神聖な祕密部屋として圍ひ込んだものだといふ姿は見えます。

それに、今一つ大事な、延年舞の山は、勿論、大嘗祭其他の古い祭りに曳かれた標の山の意義に於て立てられて居たに違ひありませんが、大昔音讀せられないで、まだ標山であつ

た時代、神の依るところのしるしの山だと考へられて居つた頃から、内容が段々變化して、標の山のうちには他の物をも含む様になつて居たらしい事は、早くから考へられます。其は、此神物なる事を示された山の中に、同じく神物となるべき人が山ごもりをして居るといふ考へが含まれて來た事を言ふのです。

標の山に人形を立て、其人形が人間の舞人になり、舞車マヒケルマに變化して來た一方に、延年舞などでは、造り山の上に、女装した稚兒が控へて居つた様です。

とにかく、山を立てなければ延年舞の完全な形が備はらなかつたといふ事だけは申されまゝです。此山は、ねりもの藝には、非常に執念深く残つて居りますが、舞臺藝の上では、痕跡といへば痕跡、或は別殊のものと言へば、さうも言へ相なものが、歌舞妓芝居に存して居るばかりです。即、高野博士が謂はれる山臺の事です。

何故舞臺の外邊——後には周圍——に山を立てるか。勿論、藝能を行ふ神を迎へる形式です。だが、其に早くから、前に言つた別の意味が加はつて、藝能を行ふ神の出て來る時に、其山ごもりをして精進潔齋の生活を續ける者を控へさせて置く場所と言ふ意味を生じて來

たのであります。此は、文獻の僅な延年舞の山を、却つて花祭り側から説明する事が出来ます。詳しく言へば、花祭りと關係の深い、神樂の山であります。

今日の花祭りでは、此山を立てる式を行ひませんが、此は、かなり重大な事の忘却と言はねばなりません。恐らく此山は、花祭りに於ては、また複合して、柴燈サイトウ——多く今、さいと・せいと——と稱する庭燎ニハヒの中に含まれてしまつたのでありませう。だから山見鬼が出て山割りの儀式をし、また柴燈の火を掻き散らす所作をする事にもなるのでせう。

こつむろと白山

實のところ、神樂についての私の穿鑿は、甚不ゆきとゞきでありました。肝腎の早川さんからも、ほんの斷片を聞かされて居たのに過ぎなかつたのです。だから殊に、この方圓に、極めて遺漏や、未熟な議論の多いのは、恥ぢても恥ぢきれない。もう「花祭り」の本文二冊ながら刷れあがつた今になつてやつと、纒かな資料が、手に入りました。早川さんに見せて貰つてゐない此方面の採集と、多少違つた處があるか、全く一致したものか、其さ

へ今となつては、見比べさせて頂く暇がありません。

今年の春は、三河へ二度、遠州へ一度、別々な機会を作つて這入りました。二度目は、新野の雪祭りを見て、凍てついた山越えに大河内の村で、村長遠山氏から、其村の暮の御神樂の話を聞きました。村の上の三州境の風吹嶮までは、踏みこむ脚もあがらぬほどの雪道です。これをおりと、南斜面一帯に、三澤の谿谷が開いてゐて、どこの山に雪があつたかと言ふ顔で春めて見えました。山内の村について、鍵取りの禰宜屋敷榊原氏に滞在させて貰うた間に、村の上手屋敷の老人が、八十を越してまだびん／＼してゐて、神樂の事にも通じてゐると聞きました。この人を明日訪ねようといふ前晩になつて、村の中に生死の境にある病人が出来ました。外來の客が心なく長逗留して、狭い山家のつきあひを缺かせては、と氣がねしないでは居られませんでした。其で、神樂調査の項目だけを、村の辻紋平さんに頼んで、俄かに發足した。其報告が今になつて、私の手もとに届きました。だから、私の神樂についての考へは、早川さんの話と此に據る外はないのです。

白山の中で、生れた者が、此から出て来て新しくゆまはり・きよまはりの祓を受ける行儀で土地では、生れた者を淨める産湯をつかふ意味だと申して居ました。舞處の中の湯釜の湯——笹の葉——に花祭りの湯立てと同じ様に浸して、生れ子の全身にふりかける事である。

かうして次の晩——四日目から、花祭りの形のものに移るといふのは、成年戒を経たもの、中心行事になることなのであります。だから、前成年戒を意味する少年の花の舞を先として新成年及び、又は成年の形に復活した人々の舞を續けるのでした。地固めその他の舞は、舞の初中後大切な部分に割りこませて、舞を正式のものとして整へる一種の威儀なのであります。前々から申して來ましたが、日本藝能にある作り物を、私は總稱してうつむろ——虚容——と名づけて居ります。うつむろは隙き間のない義の語根形容詞です。無間堅間なども、實は一つのうつむろです。而も更に、衣帛の類で、齋み人を包みこめる場合があります。此がうつむろはたであります。此が發達して來ると、ちはや・おすひなど言ふ物に變るのです。かう言ふ掩ひ物をすべて、白で作りましたのが、古代信仰上の約束だつたらしいのです。後には、成年戒といふより寧、前年來、神護(?)の祈願をかけてゐた人は、女子どもに至

るまで、此山に入つて、生れ替る形をとつたのであります。何時ほどからか、法印などが、合理化したものと見えて、山ごもりする事を浄土入りと言ひました。其から白山へ架け渡した橋を經文の橋——即、微妙(?)の橋——と言ふ様になつてゐました。此下の流が三途サンツの川だと稱へたのは、どこまでも、常識佛教化したものであります。

多少記憶違ひもまじつてゐるのでないかと思ふのですが、此三途の川は、舞ひ屋の方角どりに従うて、北(子)・丑・寅の方にある川か澤を利用したものです。若しな節は、北から東へ向け流れ川のある形を作るといひます。大抵幅一丈から二間まで位に、深さ四五尺に掘りこんだと言ひます。その外の部分も書きたいのですが、あまり詳しくなると、早川さんの分と重複しませうから、私の話にいる點だけに止めます。

花屋即舞ひ屋の中に、舞處が出来るのですが、神樂の場合には、神樂屋(?)或は神樂屋敷の近邊に別に舞ひ屋を作り、其大部分が舞處になる訣です。だから、神樂屋と舞處の關係が花祭りに於ける、神社の前で舞ふ式の出で来る事を明らかにしてゐます。

神護の祈願のかけてある人は、舞人の資格を持つ事になる。さうして橋を渡るのに、十人

の中一二人は、きつと渡れぬ者があつたさうである。渡れたものは後生は善い處へ生れるといふ。渡れない者に對してはお前は後生がわるいから渡れないで、此後は一層善心になつてくれ。今後神樂のある時は、極樂へやつてやるから、とよく／＼言ひ聽かして還したといふ。橋を渡つた者は、極樂浄土へ行けるのだと言ふので、白山へ這入る。

白山の中には、惡魔、外道が住んでゐて、這入つて來た神護人を苦しめ苛む。夜明けに及んで、山見鬼が救ひに來る。同時に澤山の伴鬼が、白山に這入つて、惡神を對治して、斧を以て白山残らず切り拂ひ、助けた人々を連れて、舞處に戻つたといふ。其上で、うまれきよまりが行はれるのであつた。

話は前後したが、白山は少し早川さんの採訪とも異傳が存してゐる様だから、何かの參考に記して置きたい。

又辻さんの報告で我々におもしろくて、や、疑問になる件があります。白山はほんたうの小山を使ふこともあり、故ら作る事もある様だ。凡五六畝の地を宛てる。其中に常盤木が多くあればよし。ない時には、檜・樅の木・香の木など青葉の木を伐つて來て、山一面に立

て並べ、其木の間に道をつけ、山の外まはりには、白木綿を引きまはし、又、青葉の木々の枝々には、白紙の幣を吊し一見如何にも、白山らしく感じる様にしてあつたと言ふ。うつむろの形が、こんなに變化して來てゐる而も、元必しも無蓋の山でなかつたとも斷じられないこと、前に述べた通りである。

神樂から、花祭りへの繋ぎが、山見鬼になる訣で、よく考へると、修驗の先達のある元の形を偲ばせる。白山を切り拂ふ式は、威力ある者の誕生と共に、うつむろをとり崩して出る形である。其にあやかつて、多く新達が人間界に生れ出る形らしい。而も、新達に戒を授ける前に苦しみ抜く事は、成年式通有の方式で、此を外道の苛噴といふ風な形で示したのであらう。其から愈産湯の式があつて、花祭りの方へ移るのであるが、花祭りの形に屬する方面にも、此をくり返すのが、山見鬼の籠割りの儀である。此破られる籠は、思ふに、白山とおなじ物である。益がま・かまくらなどに通じた一種のうつむろです。山見を一名山割りと言ふ事の説明も、既にいたしましたでしたが、全く白山を割り、同時に幾種の籠山を破る行儀にまでも残つたものと考へます。

橋わたり

私は筑摩の鍋祭りの鍋も、一種物悪みのうつむろの笠の様になつたものと思ひます。ちよとど、市女笠にむしの垂れ衣フスをさげる様になつたのと、おなじ理くつです。此が、一面には、鉢かづきや、鍋かぶり——信仰變轉して、日進上人にまで及んだ——の上臈の物語を生むことになつたのです。外氣に觸れまいとする物忌みなのです。ところが、幾度も祭りの都度若返らねばならぬ爲には、其かぶり物を一つづゝ重ねて行かねばならぬ様な考へ方も生じてまゐります。やがて又、男を持つた數だけかぶると言ふ解釋も實現せられる様になりました。此には、早川さんに神樂の話を承つた際にも申した事ですが、沖繩久高島クナカに近年まであつたいざいほうといふ神事と一つ意味のもので、巫女の資格を受けるこの行事以前に、竊かに男した女は、舞マシび場ナベから、神カミ殿ノに架けた低い橋が渡れないと申します。若しうまく人や神を欺いて渡り了せたものでも、死んで後、淨土へ行けぬと申します。やはり神巫資格と貞操問題との關係です。が、かうして筑摩鍋・久高神人クナカニチユ定めと並べ

て來ると、貞操問題よりも、物忌みの完不完に原因がある様に見えます。私は、これを橋が、り橋殿の舞の起原と見るのです。

山伏の方にも、どうも此橋の信仰がある様です。役行者・一言主ヒトコトヌシに繋げられた傳説、葛城の久米路の橋や、その中絶えが、歌枕は人氣のあつたのも、元はと言へば、御嶽精進ミタケセイジンの、大昔からさうした渡れる渡れぬが問題になる橋の信仰があつたからだと思ひます。今も全國の行場に通じてあるありのとわたりや、胎内潛りのあるのも、此佛なのでせう。全體日本だけの男寵の歴史を辿つて見ると、行きつく先は、古い未成立時代からの修驗屋にある様です。あんまり適切に用語まで解いて行くのは不快ですから、よしますが、も一度讀み返して貰ふと、其廉々は知れようと思ひます。

女にも山籠りの事實はありますし、多少古くから、山伏のこれに關與した痕も窺はれないではありませんが、男にするのと、女にするのとは、別々の神人の爲事に岐れて行つたものと思はれます。日本の古代信仰に、橋の重要な地位を占めてゐた事が考へられないでせうか。

花祭り以最注意しなければならぬ事は、神樂を改作したとすれば、修驗の方式が、其規範になつて居るに違ひありません。だから、舞ひ處の外邊に立てる山を、山伏の柴燈と一つにするのは無理のない事です。そして此が、屢々家に於て行はれる爲に、柴燈を出来るだけ小さくして、實のところは、柴燈とは言ふべからざる焚火にしてしまつて居るのであります。

神樂の一大事とせられたものは、山についての行事で、凡そ、若衆の舞ふ、三つ舞ひ・四つ舞ひに、直に接して行はれて居たのであります。私の獲た三澤・下黒川・上黒川などの傳天正・傳慶長・傳正徳以下、五種類の神樂の次第書を見ても、大體、生れナマきよまりの山立て、或は山を立つべし、山をまつるべし、山をたづぬべし、山を賣り買ふこと、いふ事から、子供の誕生に比喻をとつた行事を行ふ様であります。

そして、此行事を、總括して、うまれナマきよまりと稱してゐました。勿論、ゆまユマはり、きよまキヨマはりと言ふ俗神道にも通用せられた、古い言葉が、其用途と直に聯絡して、生れナマきよまりと言ふ様な形になつたものと思つていゝ様です。

そして、此行事を行ふものが、山割り鬼で、花祭りの中、最重大な神形であります。たゞ、花祭りでは、山を割るといふ事を主にしなくなつた爲に、山をたづぬる方面から、山見鬼なる名前が普通になつて来たのだと見てよいと思ひます。

かりそめの結語

北設樂の園村を流れる大入川オホニラといふ川があり、其川上の山の上に大入といふ、寒村があります。こゝに花山姓ハナヤマを名のる家があり、花山院の裔だと傳へてゐますが、勿論それは傳へに過ぎないでせう。併しこゝが花祭りの元祖だと言ひ、一つの根據地にはなつてゐる様です。現在は豊根村三澤の山内・振草村古戸などが中心になつて居ますが、段々里近く下に入りて来たとも見られます。山内の花も、一代前に有力な人があつて、方々の花を調べて改修したのだと言ふ者があります。或は妬んで言ふのかも知れませんが、古戸・山内が元祖だとも申しきる訣にも参りません。つまり、方々の村の舞ひが相互關係を結ばなかつた

もつと古い状態を考へて見なければならぬのです。

要するに三河の山奥には、最初から單に花祭りだけがあつた訣ではないでせう。色々な藝能を行ふ一種の流浪の宗教家が居つて、彼等は時々里へ祝福に下りて来ては、里の嗜好に應じた藝能を含んで行つたのだと思ひます。花祭りの村も、最初は、さうたくさんはなかつたのでせう。奥というても、最初は山の浅い處だつたのが、後に、里が開けて行くに随つて段々山奥に入つて行く様になつたのだと思ひます。たゞ考ふべき事は、高山靈山などいふものがあると、そこへ入つて行きます。此は、彼等の旅行には常に一つのめどであつたのです。

只今のところでは全然訣らないのですが、大入は或は古い村かも知れません。三河では一番奥で、殆ど遠州領といつてもいゝほどの山奥で、山の彼方には水があります。此は大いに考へねばならぬ事で、山の上の池・瀧の水で淨めに来ると言ふ考へは、日本の宗教では大切なものになつてゐたのです。いつの時代か、遊行神人の一團が三河の山奥に屯したのには地勢の關係がある、と前に述べて置きましたが、境山を下りると天龍の流れがありま

致

す、此水が彼等の信仰生活には大切だったのでせう。

問題索引

- 口傳記録歌論中の問題は、一部分を除く外抽出を省きたり。
- 同一の問題多き故、頁数は時に脱落せるもの多し。
- 同一の問題にて各種の稱あるものは時に或一種を採りたり。
- 本文中細文字は前編、太文字は後編問題を示す。

凡例

ア

天の中川	4
操り狂言	7. 534. 772
悪態祭り	26. 91
悪態口	134. 454
扇の手(舞の手)	86. 187. 190. 214
扇	131. 176. 189. 201. 334. 548
扇笠	59. 107
天(あま)の祭り	94. 108. 691. 50. 53
天(あま)の香	180
呵伝(あうん)	155
悪魔切り(舞の手)	196
綾笠	211
あほり(舞の手)	224
荒事	261
天ノ御女命	262. 406
あいもん(相問)	247. 286
商人	320
天の岩戸	362. 129. 138. 257
熱田	366. 374. 396. 397
愛宕山	882. 395
愛宕山の天狗	491
青柴を以て葺く	88
蘆毛の駒	150. 154
小豆飯	194. 621
小豆粥	577
近江の湖	302. 516. 532. 544
	564. 300. 477. 723
あれといふ屋敷	322
あれといふ地名	583
青葉の笛	358
あんじやう	406. 425. 430

悪師	531
あけた三番叟	191. 531
イ	
池の明神	29. 423. 636
一力花	34. 36—9. 148
一力花の表徴	35
一役花	34
衣裳	69. 176. 575
いりたち	94. 105
飯綱(いづな)	101. 416
いち(市)	131. 451. 186
市の舞	172. 175. 185. 317
市巫女(いちみこ)	179. 331
いりまひ(舞の手)	198. 206. 209
入合ひ	772
岩戸明けの舞	267
伊勢渡會郡	275. 324
伊勢の國	362
伊勢笛	330
伊勢のはやし	349. 182
伊勢の御神樂	130
伊勢の神樂師	480
伊豆	384. 389. 408
出雲	403
糸綿かけ	103
銀杏(いてふ)	207. 562
糸つき	245
岩(石)清水	259
石	90. 329
石の上に死體を置く	591
石佛	583. 586. 588
いた屋	322

問題索引

八七〇

犬	75. 576. 629. 635
いづみ(和泉)式部	402
ウ	
産衣(うぶぎ)	61. 174
産湯	75
産衣果し	181. 186
産注連(うぶしめ)	78
産神	82. 656
うはぎ	69. 186
うたぐら	77. 117. 121. 127. 165 204. 206. 210. 339. 716. 315
うたぐら帳	343
閏年	89. 226
閏の舞	251
生れ所の話	288
生れた時の話	288
生れ清まり	450. 20. 58. 186. 193
うまれこ(生子)	20. 59
歌と拍子	377
歌を掛ける	314. 519. 534. 555. 567. 63. 709. 719
氏神	49. 99. 165. 403. 440. 526. 581. 616
氏子代	427
氏子入り	437. 186
打上りの事	290
うたひ	208. 576
牛若	242
團扇	569
エ	
恵方	101. 384. 405

八六九

えぎ	222. 226
繪馬	542
榎	134. 142
回向狂言	577
役の行者	590
オ	
大千瀬川	12
大入川	12
大入系	12
大入	465. 616
鬼部屋	50
鬼	135. 233. 460. 486. 779
鬼の出現の形式	234. 358
鬼と悪口	456
鬼棚	504
鬼と白山	111
鬼木戸	544
鬼祭り	782
おに(鬼)木	642
おはた(幡)	58. 280
大國主命	264. 472
おきな(翁)	266. 292. 405. 498. 195. 247. 324. 404
おきな屋敷	442
お伴	238. 267. 269
御禮の事	275. 293
遠國來訪	277
大峯	395
親方	417. 211. 357
おつきあひ祭り	441. 471. 616
太田白雪(人名)	447
大野邊聞書(書名)	447. 559

おと(乙)	451. 186
おくない神	503. 204
覚え張	507—9. 388
おんかいむかひ	47. 229
おりたち(折立)被ひ	54
おりゐ(折居)の遊び	57
おぼろけ	103
おとこ木	231. 641
親子の舞	245
おんべ(御幣)	400
親より賢き	483
御假屋	546. 553. 559. 562
大塚小塚	559
おひねり踊り	570
お伊勢の山	575
折柴(おりしば)	631
カ	
川の名	4
川に據る系統	12
紙	13. 58. 62. 142. 410
神洗ひ	32. 45
神部屋	49
神おろし	50. 83. 99. 118
神道(かみうち)	64. 403
神入り	83. 98. 103. 123. 135. 375 690. 47. 50. 229
神ひろひ	83. 99. 103
神渡り	99. 101
神迎へ	101
神歌(かみうた)	123. 341. 375 379. 315. 330. 336
神上げ	136. 141

神がかり	118. 186
神の出現の順序	232
神と拍子(樂)	99. 336
神の兒	450. 635
神の世繼	450—2
神座(かんざ)	51. 315. 362
神座渡り	83. 104
神座と「せいと」の客	453
神座の舞	316. 398
神父神母	628. 632
神子(かんど又かご)	628. 60. 75. 115
かいしよ(會所)	49. 54
竈(かまど)	54. 59. 68. 77. 115 183. 190. 244. 408. 362
竈被ひ	94. 115. 319. 699. 595
竈の前の舞	190
竈のくろの舞	190. 208. 228
釜洗ひ	226
釜割り(舞の手)	256
形代	61
かきだれ	61
金山(かなやま)神	77. 406. 628
かうぬし(神主)	79. 581. 13. 46 49. 573
刀(かたな)	82
刀立て	83
門(かど)しめ	96. 98. 50
門はやし	401. 638
門神(かどがみ)柱	640
鍵取り	101. 145. 414—7. 321
笠幡の祭り	129
笠と杖	163. 108
傘鉾	575

八六八

笠神	582
かうかづら	162, 166, 82, 170
かみもどき	210
神樂	261, 391, 448, 146, 526, 539
神樂男	129, 137, 145—6
神樂と萬歳の村	589
神妻(かづま)	384
勘太夫	24, 592
樂の舞	94, 398
樂造(がくざう)	123, 330
樂屋	225
樂頭	227
鳥跳び(舞の手)	198, 230, 576
語りの形式	287
語りの区分	298
鎌倉入りの話	290
加持祓ひの歌	375, 407
鍛冶職	486
鍛冶	407
籠	196, 575
かつぎ(昇ぎ)	208
伽藍祭り	227, 330
海道下り	324
街道を踏分ける	401
寒峽川	329
かんだ屋敷	329
可睡齋	410
かさし	412, 414
肩掛け	548
掛踊り	571
かなぎ	642
キ	

木の根祭り	26, 207, 225, 585
木の根祭りの歌	604
きんがさ(衣笠)	59
きりくさ	81
きりはぎ立て	82
きるめ(切目の王子)	83, 99, 105
	382, 8—11, 47, 49
鬼門	152
清く美しい舞	213
狂言花(きやうげんばな)	326
狂言系(きやうげんすじ)	422, 529
	533, 539
狂言の真似	525, 538
狂言好き	533, 539
狂言場	536
狂言と同心	546
氣狂ひ	502
木地師	486, 776
京人(きやうびと)	73
舊幣祭り	174
吉郎(きちらう)	207
君の舞	245
君ばやし君もどき	409
清水観音	393, 581
杵の音	565
ク	
くもかり	64
熊野神社	29, 37, 436, 440, 450
	126, 179, 382, 334, 398, 581
熊野神社の寶藏	575
熊野湯立て	130
熊野神樂	167

熊野田樂	384, 398
組	427, 433, 442, 452
組頭	427
願主	36, 128, 130, 163, 462
	317
杏形の餅	112
九字	152, 154
歟	214, 619
歟柄祭り	620
黒倉田樂	283, 291, 310
黒尉	285, 191, 404, 483
口傳書	291, 327, 508, 510, 6, 22
	65, 783
口拍子	332, 246, 247
口移しの傳承	349
くもん	213
藏入り	245
観音堂	95, 310, 328, 579
観音の御法樂	258
観音堂由來	587
鞍馬天狗	254
観音と塚處	584
桑の弓	326
丸人踊り	384, 400
くにしげもどき	401
くせやま	635
供納料	591
花山天皇の傳説	605
ク	
警察干涉	21, 432, 520, 522
見物	37, 134, 178, 229, 240
	453, 455, 460, 245, 513

稽古	78
げどう祓ひ	155, 160
眷屬	238
元服	58
げんど	182, 185
ク	
五色	13, 58, 61, 65, 72, 394,
	402, 93
五色の吹流し	68
五色の鬼	264, 111
五色の幣	627
五色の紙を飛ばす	627
五方	53, 59, 61, 64, 102, 177, 190
	204, 212, 244, 235
五印	152, 155
五拍子の舞	217
五方の舞	133, 258, 365
五穀の種	386, 620
古事記(書名)	14
曆の取扱	28
小正月	28
小字(こあざ)循環	31
子供の成長と立願	37
紙糞	106
産	261, 376, 407, 56
滑稽語り	287, 386
こだつ	324, 434
小名	431, 436, 440, 443, 446
御幣餅	457, 459
牛王渡し	82
こでいのおそび	105
こくをう(國王)長者	125, 133, 141

御神供ばやし	227
蠶種(こたね)賣り	245
問題 子守り	244. 333
こくさ	318
索引 こくさ踏み	319
こてとり	403. 404
御祝三度	477
權作	544
小踊り	548
金剛堂	554
子育地藏	581
こだま石	610
サ	
祭場	29. 47. 57
祭具	56. 92. 390
祭場の飾り	56
祭場の祓ひ	95
祭祀團	412
祭祀滑稽	394
さげち	57. 63
笹	53. 77. 176. 180
さい幡	61
神	58. 66. 68. 101. 111. 131. 176 250. 416. 132. 140. 148
さかき鬼	240. 189. 778
座直り	94. 119. 54
八六五 さうかみむかひ	
(さうかいほかひ)	94. 54. 229
さいかづくり	92. 468. 229
猿田彦	262. 480. 712
三度元服	303. 533. 545. 265
才藏	320. 576. 592. 595

三拍子	333
三みやうど	442
三鬼(さんき)	204. 321. 358
三番叟の面	220
三番叟(三ばそ)	248. 404. 540
	542
三月十八日	271
三人踊り	399
三軒の村	543
三州横山話(書名)	9
坂垣一統記(書名)	486
酒造り	222
酒舁ぎ	245
猿舞(猿樂舞)	238
猿樂	309. 482. 531. 550
早乙女	243
さゝら	243. 245. 384. 391. 572
さをひめ	255
葬式	110
さいはらひ	334. 379. 384. 399
	400
猿子ばやし	404. 409
猿面	238. 400. 549
櫻太郎	406. 433. 437
棧敷	513
差蠟	538
シ	
神道花佛花	13
神道	14. 711
神社祭場	29. 38. 55. 68
神名帳	574. 243
神名の唱へ	386

神事舞太夫	24
神事舞	17
しづめ	21. 38. 138. 145
	148. 417. 495. 503
	11. 216. 416. 574
	598
新年	26. 28
霜月	27. 600. 607. 194
人家祭場	29. 38
試演	43
仕度部屋	50
注連	57. 78. 81. 84. 98
	163. 182
注連に餅と柿を生らす	113
しめの舞	235
四目(しめ)の切越	84
しめふじ(注連藤)	622
直垂	70
白木綿	70. 236. 500. 91. 116
白麻	70
白粥	81. 550
白山(しらやま)	87. 165. 6. 87
	97. 110
白山と舞戸	95. 102
白山と僧侶	110
白尉	495. 499. 189
白餅(しろもち)	183. 227. 617
しら拍子	309. 482
代(しろ)馬	319
精進	78. 222
上日(じょうび)	93
墜	82. 95
式三番	94. 315. 545. 548

七十五	109. 246
七所明神	310
七福神の舞ひ	360. 597
七人塚	450. 387. 591. 629
七名字	450
七年目	6
七郷に分る	583
七人の狩人	628
浄土	165. 622. 608. 635. 632. 629
浄土入り	16. 19. 59. 108
	110. 632
四方門	187. 50. 55
四方へんべ(舞の手)	209
四方の舞	184
四寸の鍵取り	284. 499. 320. 321
四方立て	321. 50
四本柱	315
四天殿(してんてん)	334
敷物	172
試煉	221
詞章の傳承	290. 292
獅子	319. 112. 188. 380. 409
守護神	387
設樂舞	398. 706. 712. 651
設樂氏	654
設樂	653
洒落	455
社會制裁	459
下(しも)	416. 322. 547. 576. 613
十二みやう(名)	448
十二軒	548
十三歳	450. 58. 136. 193
十王堂	359. 546. 576. 520

問題索引

八六四

十七	380. 572
しやごじ(社護神)の舞	85
問 しやぐじ	336. 386
題 鹿の胎兒(さご)	194. 620. 622
素 鹿を射る	194. 617
引 庄屋	210
所能(しよなう)の手	206. 236
しんたい(御神體)	221. 252. 291
治部	247
しやち(幸)	383. 625. 627
しやち山の神	628
數珠	667. 410
寺社奉行宛書狀	554
焼香松	568
巡業區域	599
しゝ祭り	194. 617
精靈棚	574
秋風帳(書名)	775
ス	
諏訪湖	4. 357
諏訪神社	129. 581. 622
鈴	128. 132. 176. 189. 204. 207. 331
須佐之男神	262. 480. 712
水神	388
摺古木	267. 270
すいしやく(垂迹)のあすび	102
墨ぬり	229. 402. 548
墨ぬり川樂	357
杉を祀る	504. 590
セ	

八六三

せんじ(僂事)	49. 55. 436
せいと(庭燎)	49. 54. 134. 436
善の綱	64. 462. 21
錢(ぜに)	62. 96. 105. 142
誓約	49. 53. 116
背紋	87. 437. 229
性的場面	236
千明長者	280
善明長者	149
驪り	154
せんだの尉	69
仙千代丸	411
554	
ソ	
添へ花	461- 3
僧と女	406
曾我の十郎五郎	507
惣田樂	314. 334. 400
そぶかへ	628
蘇民將來	747
タ	
短冊	59. 63. 79
禱	71. 188
玉の舞	89. 491. 562
玉の明神	107
玉世(依)姫	150. 154
玉かつま(書名)	177
玉手筥	265
太刀	116. 155. 158
太刀を抜いて舞ふ	148
託宣	118. 475. 567

太鼓の撥	119
太鼓	121. 173. 330. 404
太夫	320. 597
太平樂	376
大將軍	142
大師	389. 393
大行(きやう)神(事)	142. 98
棚	144
松火	233. 256. 278. 284. 337. 320
對立の神	240
たから	268
たから(寶)明神	622
寶ぞろへ	639. 649. 67. 302. 478. 687
高天原	398
手力王命	406
旦那	437. 56
たあふれ	457
建師大工	664
瀧ばらひ	684
高嶺祭り	684
龍(たつ)頭	50. 88. 93
田遊び	207
たよがみ	227
高足(たかあし)	237
田村	253
鷹の羽	310
田植の次第	314
田植歌	352
多聞天	327
俵背負ひ	382
種賣り歌さば賣り歌	442
だんじり	499
臺本	528

足袋	541. 576
ダンス	542
たまの木	561
大日堂	564
段物の最初	598
だりがみ(神)	634
チ	
地狂言	7. 34
地狂言舞臺	777
稚兒の舞	210. 235
稚兒	361. 544
ちはや	212. 410
千代の御山	252. 573. 62
地笛	330
地能(ちなう)	208
地謡ひ	253
地念佛(ちねんぶつ)	573
鎮守祭り	226
茶湯(ちやたう)	110
茶桶(ちやをけ)	604
中老	519
チャリ系	527
ツ	
槌	73. 264. 474
つるぎ	73. 189. 210. 216
つるぎ(劍)と湯	225
づんの舞	132
劍(つるぎ)立て	597
對歌	347
つじがため	633
津島	383. 396. 444

八六二

つしの祭り	53
つわりもの(おつわり物)	72
鶴の舞	240
露拂	549
椿	562
杖立傳説	585
槻を祭る	585
土御門家	594

テ

天龍川	3. 6. 12. 77. 539. 124. 304 306. 609. 631. 712
田樂	7. 428. 452. 246. 527
田樂おどりの歌	381
田樂次第書	338
帳屋	32. 37. 50. 17
天狗祭り	97
天狗を呼ぶ	231
天狗松	625
天を打つ	116. 52
天白(てんぱく)	143
傳承者	14. 96. 389
手拭被り	520
寺棧敷	546

ト

遠山川	7
特種の行事種目	22
殿附(とのづけ)	99. 102. 110
殿入り	99
殿舞	243
烏冠(とりかぶと)	145
土公神	161. 262. 68. 98

とりうた	341. 354
戸隠神社	130. 139. 148
鳥居祭り	330
年男	331. 384
年男の口上	384
徳太郎	343. 345
とうどうたらり	365
どうど屋敷	615
どうどといふ神	616. 618
銅鍬子	330. 392
鳥反門	408
堂めぐり	409
豊川	569
道中萬歳	597
としばた(畑)	635

ナ

奈根川	12
中申(なかまうし)	34. 136
中人(なかうど)	66. 70
中臣の被ひ	315
投餅	98. 108
投纏頭	529
名乗り	458
浪合記(書名)	450
なりひら(業平)	391. 406
長柄長者黄鳥塚	513
長袖の隠れ里	564
七組	211
七組の神樂	592

ニ

人形振り	260
------	-----

人別帳	445
日本中一目に見る	502
庭定め	225
庭燎(にはび)	226
庭上り	233
庭ならし	235
庭田樂	333
二十七番	312
二の宮	385
鶴娘	514
樂市(にやくいち)王神	584
にうぎ	642
握飯	110. 643

ネ

禰宜	81. 89. 414. 312. 317
禰宜屋敷	415. 419. 426
禰宜と面形	417
禰宜の行法	417
禰宜の舞	189
ねぎとみこ	71
練祭り	176
根扱ぎの神	259
ねんねん坊子	244
念佛堂	562. 569
念佛踊り	571

ノ

能(のう)	84
能登之守	253
のうしゆう(能衆)	211. 221. 230
能樂	550
祝詞	85

のたくり	247
野々宮	255

ハ

花神樂	6. 706. 4
花	11. 163. 391. 398. 404 600. 607. 610. 619. 626 632. 635. 115. 502
花宿(花屋)	30. 38. 78. 8
花道	54. 516. 547. 552
花そだて	161. 109
花を開く	99. 105
花の御串	162. 166. 461. 463. 626. 622
花の山(島)	163. 513. 528. 632. 115
花笠	211. 335. 571
花の淨土	394
花禰宜	414. 420
花の本地	619. 621
花祭りの開祖	26
花のほんげ	108
花の木	251. 528. 603
花好き	430. 434. 459
纏頭(はな)	464. 528
纏頭札	511
蜂の巢	62
はまみづ	77. 605
はますな(砂)	77. 608
はま弓	194. 620
はま矢	195. 620
はまいば(濱射場)	605. 607
濱井といふ姓	607
囃し	121. 123. 369. 456. 244. 548
鼻垂し	270

唯し面	318. 320	東(ひがし)	384. 394. 399. 400
發聲	123. 340	東のはやし	349. 182
問 鉢巻	151. 188	人の名の附く面	471
題 八幡	326. 581	人の名	24
索 八大龍王	438	火を移す	240
引 橋がかり	95. 102	びんざさら	319
橋の拜見	109	晝田樂	330
蓮の花	127. 136. 144	晝飯持ち	332
鼻うり	191	毘沙門	327. 367
はね能	209	披露	374. 402
羽古突き	244	ひよどり	204. 380
梅花の舞	252	ひ(火)おんどり	561
はねひろひ春駒	407	ひかりどう	408
放歌(はうか)踊り	571	引幕	526. 545. 548
はかせ(博士)村	594	ひとくらひ	56. 100
初午の種取り	619	ひとほし	624
はちじやう	639		
はぐひ	641	フ	
はざ	619. 642	富士川	5
ばちやま(罰山)	635. 658	冬祭り	6. 25
		振草川	12
ヒ		振草系	12
びやつけ	35. 59. 138. 163. 165	振草の郷	780
	258. 265. 461. 93	笛の舞	133
ひいな	61. 285	笛造	330
ひじり(聖)の舞の歌	89	笛	330
ひじり(聖)	438. 11. 103	踏む	183. 254
ひのう	145. 416. 478. 204. 357	ふりならし	190. 202
ひのねぎ(禰宜)	266. 273. 285.	分郡(ぶんこほり)	268. 273. 276. 116
	405. 478. 495. 320	古話し	289
ひしやく(柄杓)	158. 361	舟路(ふなじ)	279
一人へんべ(舞の手)	208	舟に供物を盛る	183
拍子	267. 270. 329. 332. 377	舟渡し	239

布施袋	322	盆	74. 211. 214
ぶつきりやう(服忌令)	79	盆狂言	531. 546
舞臺	314. 573	鉢(ぼこ)	260
舞臺の位置	554. 573	鳳來寺	358. 383. 513
ぶしや(奉射)	194. 326. 617	鳳來寺田樂	204. 206. 779
不動の舞	363	法華經	393
福祿壽	377	ほうまくら(頬枕)	500
振付け	516	抱擁	71
		棒	188. 334. 359
ヘ		奉納田樂	246
部屋	50	佛の舞	247
部屋頭(へやがしら)	80. 13	布袋	377
へつゐ清め	77. 46	法界坊	529
部屋入り	102. 50		
部屋番	645	マ	
へき	131	祭りの傳播	6
へんべ(反閉)	144. 150. 161. 183	祭りと村の氣風	11
	200. 208. 253. 263	祭りの夜	26
	410. 779	祭りの表徴	35
幣取り	79. 101. 145. 414—7. 437	祭りの中心	134
へいじつくわい	437	祭りの神人	411
別當	210	祭りの代表	437
平家流人	358	祭りの費用	6
辨財天	375	祭りの開祖	26
辨慶	255	舞屋	30. 32
		舞戸(まひと)	35. 49. 53. 56
ホ		舞上げ	130. 209. 185
豊年花	34	舞ひの形式	172. 187
豊年と狂言	518	舞子の資格	176. 437. 435
本樂(ほんがく)	43	舞ひの持物	175. 189. 214. 216
柁	54. 56. 226. 399	舞子と年齢	181
梶ひき	239	舞ひの基本	182
梵天	65. 88. 98	舞ひの動き	185. 203

舞ひの型	186. 192	みづのう	145. 416. 418. 219
舞ひ装束	187	都入りの話	288
問題 舞ひの時間	187. 221. 230	みこ(巫女)	271. 392. 192. 649
舞ひの口傳	256. 260	みこの面と眼孔	500. 643
舞庭	226. 362. 393	巫女の舞	235
索引 萬人供養	34	宮太夫	414. 417. 24. 392. 614
圓鏡	62. 68	宮参り	59. 193
まさかり(鉞)	72. 259. 189. 358	みやご(宮子)	452
又四郎	630. 631. 104	三河國二葉松(書名)	447
的張り	59. 174. 193	三河國官社私考(書名)	584
萬歳樂	193. 316	民俗藝術(書名)	455
幕屋(まこや)	225. 419	みたま(靈)	126. 135. 142
毬つき	244	みたま祭り	642
松目(まつめ)観音	344. 544	水窪川	206
幕摺と靈木	567	みなくち(水口)	242
幕なし狂言	580	御輿の渡御	360. 384. 549. 553. 559
萬燈山	570	みさき(靈)	629. 634
萬燈	571	みづぐひ	640
ミ		ム	
みやならし	34. 37. 43. 47. 49	棟祭り	108. 50
	75. 92. 190. 207	聲入話	288
	399. 405	筵	119
みやう(苗)	452. 342	鞭(ぶち)	234. 252
みやうど	41. 69. 82. 96. 128. 609	麥搗き	241
	621. 629. 133. 138. 141. 145	蟲送り	559
	149. 212. 311. 319. 357. 383	百足	576
	389. 392. 403. 621	メ	
八五七 みるめ(見目)	62. 99. 362. 380. 438	面申(面立て)	135. 497. 354
	8. 51. 104. 169	面と松火	234
みくし	63	面の彩色	92. 468. 483. 229
袂ぎ	96. 50	面の名稱の變遷	480
袂ぎの水	605		

面の作者	484	山相續	98
面を被る形式	487	山家早乙女	244
モ		山姥の舞	254 問題
もちゐ(もちひ)	28. 642	山姥山おじ	132, 148 題
もとばな(花)	51	山伏の墓	633 索引
百綱(もゝづな)	64. 462. 21	八島壇の浦	253
もどき	247. 251. 273. 284. 292	山作り	635
	236. 237. 401. 409	御代の御山	100
問答の詞	248. 273. 279. 293. 100	鎗	236
茂吉	264. 406. 472. 475. 321	矢を射る	195
餅搗き	322. 245. 400	やくごといふ地名	329
餅あぶり	399	薬師堂	380. 576
申し兒	450. 135. 143	やす	384. 399. 641
模擬の歌	457	やすら	564
もうれい(亡靈)塔	633	矢剱川	782
ヤ		ユ	
役揃ひ	43. 81	雪祭り	7. 146. 281. 434. 468
役割り	79		612. 783
役割り帳	25. 29	ゆだな(湯棚)	51. 140
役舞ひ	435	ゆをけ(湯桶)	51. 77
役者	524. 545. 550	ゆござ(湯産)	51
やつはし	59. 62	ゆたぶさ(湯束)	51. 77. 117. 226
やまみ鬼	86. 240. 100	湯立て	77. 174. 226. 508
山狩り	140. 617		182. 363. 375
山立て	149. 62. 98	ゆぶた(湯蓋)	59. 63. 163. 461
山を割る	242. 256. 102. 112	ゆはぎ	69. 212. 451. 225
山形に踏む	255	ゆかたびら(湯帷子)	71. 176
山を見る	261. 101	ゆだすき	71
山たづね	60. 106	ゆたう(湯桶)	74. 211. 214
山の主	63	湯を灌ぐ	116. 230. 451. 187
山の賣買	65. 66. 68	湯殿	117
		湯をはやす	318

	湯覗き(お湯覗き)	665
	ゆたぶさの拜み	665
問	ゆあみ(沐浴)	57
題	湯さかひ	57
索	湯の島	611
引	弓八幡	251
	弓競べ	403
	弓の式	549
	ゆか(床)	528
	伊良(ゆきよし)王	586. 603

ヨ

	夜祭り	25
	依代	81. 83. 88
	呼出しの拍子	203. 337. 371
	四ツ鬼	263
	吉野	394. 405
	よふぶねを漕ぐ	112
	與名藏	242
	義經	253
	蓬の箭	326. 620
	夜田樂	331
	よなどう	342
	夜念佛	564
	頼政萬歳	597

ラ

八五五

	禮拜の型	194
	らんじ	402
	卵塔場	585. 588. 591
	卵塔場と櫻	588

リ

	兩部神道	13. 706
	立願(りうぐわん)	31. 34. 36
		59. 163. 461
	立願の屋敷を訪る	25. 263
	臨時祭	33
	龍王	144. 418. 11. 385
	利修仙人	577

レ

	例祭	83. 36
	靈威	625

ロ

	露店	92
	六みやう	442. 446. 447. 576. 652
	六月土用の雪	543
	六十一年目	7
	六十一歳	59
	ろんぎ(論議)	67

ワ

	和知野川	7
	若い衆の祭り	32
	若い衆	525. 541. 570
	草鞋	270
	若子(の)しめ(注連)	83
	若水迎へ	610
	わかき(若木)	642

エ

	ゑぐら祭り	141. 48
	十干(ゑと)祭り	322
	十干くり	317

	烏帽子水干	225
	惠比壽の舞	366

ヲ

	和尚と小僧	410
	踊り場	553
	斧立て	624

—了—

問
題
索
引

八
五
四

